

稗田頭A遺跡

— 平成 4 年度県営圃場整備事業概木地区に伴う
埋藏文化財緊急発掘調査概要報告書 —

1993

茅野市教育委員会

稗田頭A遺跡

— 平成 4 年度県営圃場整備事業榎木地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書 —

1993

茅野市教育委員会

序 文

茅野市は、尖石遺跡に代表されるように、縄文時代文化が花開いた地として全国に知られています。毎年多くの遺跡が調査される中で、泉野地区においてはじめて、縄文時代中期の大規模な集落遺跡が調査されました。

泉野地区に縄文時代の遺跡が存在していることは古くから知られていましたが、数年来の圃場整備事業に伴い、上見遺跡、中原遺跡など縄文時代遺跡の発掘調査が行なわれました。いずれの調査においても、縄文時代中期以前の陥穴群や、縄文時代早期末前期初頭の集落が発掘されるなどの成果をあげてきました。今年度調査された稗田頭A遺跡では、茅野市の景観上の特徴である東西にのびる台地の上に、縄文時代中期後半の集落の姿がとどめられていきました。調査によって知ることのできた村の姿は、住居址が環状にめぐり、中央に多くの土坑がつくられる縄文時代集落の典型的な景観です。稗田頭A遺跡は縄文時代中期後半の人々の生活の一拠点であったことを思われます。

八ヶ岳の山なみをのぞむ広大な山麓台地の一画に、忽然と姿を現した縄文集落は、豊かな自然とともに生きていた人々に思いをはせる機会をくれてくれるだろうと思います。

ここに調査結果の一部を報告し、考古学研究者はもとより、市民の方々が茅野市の歴史を知る手がかりとなれば幸いです。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地元地権者、関係機関の皆様の深い御理解と御助力により発掘調査を終了することができましたことを心からお礼申上げます。

平成5年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角 昭二

例　言

1. 本書は、長野県茅野市泉野下横木幹II頃A遺跡の県営開場整備事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫および県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成4年8月3日から平成5年2月5日まで行なった。
4. 発掘現場における記録および遺物整理は下記の調査員、調査補助員が行なった。
5. 出土品、諸記録は、茅野市教育委員会文化財調査室が保管している。
6. 土器復元は、牛山徳博、武居八千代が行ない、遺物実測、図版作成は功刀司、赤堀彰子が行なった。原稿執筆は現場担当者である功刀司が行なった。

調査組織

調査主体者 両角昭二 (茅野市教育委員会教育長)

事務局	原 光	(茅野市教育委員会教育次長) 永田光弘 (茅野市教育委員会文化財調査室長) 鵜飼幸雄 (茅野市教育委員会文化財調査室文化財係長) 両角一夫 (茅野市教育委員会文化財調査室主任) 大月三千代 (茅野市教育委員会文化財調査室主事補)
調査担当	守矢昌文 小林潔志 小池岳史 功刀 司 百瀬一郎 小林健治 山崎貴弘 五味みゆき	(茅野市教育委員会文化財調査室主任) (茅野市教育委員会文化財調査室指導主事) (茅野市教育委員会文化財調査室主事) (茅野市教育委員会文化財調査室主事) (現場担当) (茅野市教育委員会文化財調査室主事) (茅野市教育委員会文化財調査室主事) (茅野市教育委員会文化財調査室嘱託) (茅野市教育委員会文化財調査室嘱託)
調査補助員	赤堀彰子 牛山市弥 牛山徳博 武居八千代	
発掘作業員	青木美恵子 伊藤京子 伊藤千代美 今井ちよ 今井芳博 小沢寅年 鵜飼茂子 鵜飼澄雄 牛山たてみ 栗原昇 小平久平 小平通 小平長茂 小林幸 五味ふみ 清水國恵 間 明子 立岩貴江子 東城生貴 馬場きん子 原ちよ子 平沢秀喜 平沢房江 平沢美知 藤森あゆみ 堀田桜子 宮嶋ゆき 目黒恵子 矢島ヒロシ 矢島良枝 矢島のぶ子 柳平あい 柳平いつ子 柳平年子 柳平久 山下こめ 山田良子	

目 次

第Ⅰ章 調査経緯.....	1
第Ⅱ章 発掘調査の方法と経過.....	1
第Ⅲ章 遺跡の位置と環境.....	2
第1節 周辺の遺跡.....	2
第2節 自然環境と遺跡の層序.....	4
第IV章 遺構と遺物.....	7
第1節 先土器時代の遺物.....	7
第2節 繩文時代の遺構と遺物.....	8
(1) 住居址	8
(2) 小堅穴	68
(3) 方形柱穴列	68
(4) 配 石	68
(5) 焼土址	71
(6) 土 坑	73
第V章 まとめ.....	88

挿 図 目 次

1 第1図 遺跡位置図 (1/25.000)	3
2 第2図 遺跡周辺の地形と発掘区域 (1/2.000)	5
3 第3図 遺跡の層序 (1/40)	7
4 第4図 先土器時代の遺物 (2/3)	7
5 第5図 第6号住居址概略平面図 (1/60)	17
6 第6図 第7号住居址概略平面図 (1/60)	18
7 第7図 第8号住居址概略平面図 (1/60)	19
8 第8図 第11号、12号、13号、14号住居址概略平面図 (1/60)	21
9 第9図 第21号住居址概略平面図 (1/60)	30
10 第10図 第26号住居址概略平面図 (1/60)	36
11 第11図 第27号住居址概略平面図 (1/60)	37
12 第12図 第1号、2号配石概略平面図 (1/40)	70
13 第13図 繩文時代住居址時期別分布図 (1) (1/1000)	90
14 第14図 繩文時代住居址時期別分布図 (2) (1/1000)	91
15 第15図 繩文時代住居址時期別分布図 (3) (1/1000)	91
16 第16図 碑田頭A遺跡遺構分布図 (1/400)	93

第Ⅰ章 調査経緯

平成2年度に茅野市教育委員会により、平成3年度以降の公共事業地区内にかかる埋蔵文化財の実態調査が行なわれた。この調査についての茅野市農業基盤整備課からの回答により、稗田頭A遺跡が事業範囲に該当することが判明した。平成4年3月に、発掘調査の事業量を確定するため、現地の試掘調査を行ない、縄文時代前期末から縄文時代後期の遺物、平安時代の遺物とともに、堅穴住居址28基、焼土址4基、土坑43基が確認された。この調査結果をもとに、平成4年3月26日に、長野県教育委員会文化課、長野県土地改良課、茅野市農政課、茅野市教育委員会により保護協議が行なわれた。協議結果を受け、平成4年4月2日付2教文第7-81-14号「県営圃場整備事業(根木本地区)」にかかる埋蔵文化財の保護について(通知)が提出された。稗田頭A遺跡の保護については、平成4年度に発掘調査による記録保存を行なうとするものであった。平成4年5月11日付で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を取交わし、総額13,821,000円(農政部局負担分10,020,000円、文化財負担分3,801,000円)で発掘調査を行なうこととなった。現地発掘調査は、平成4年8月1日から平成5年2月5日まで行なわれ2月8日から発掘記録、遺物の整理、報告書の作成にとりかかった。

第Ⅱ章 発掘調査の方法と経過

調査範囲内にグリッドを設定し、遺構、遺物の記録、遺物取り上げの基準とした。グリッドの基準は、公共座標x=0.000を基準軸とし、AからEの5点を設けた。これらの基準点から調査区内に一辺2mのグリッドを設定した(第2図)。グリッドの配列は第2図に示した通りである。

平成4年8月5日より遺跡の表土剥ぎ作業にはいった。県営圃場整備根木地区の埋蔵文化財発掘調査は、今年度稗田頭A遺跡の他、上根木地区の夕立遺跡についても行なわれたが夕立遺跡が当初の予想と異なり、大規模な先土器時代遺跡跡であったことから、現場担当者が現場にはいることができず、急遽他の調査員を配し稗田頭A遺跡の調査を開始した。これが本年度の事業計画に影響を及ぼすこととなった。

表土剥ぎ作業は、調査期間が限られているため、重機により行なった。台地平坦面の大部分で表土は薄く、表土直下に確認面が現れた(第3図)。調査面積が8,000m²と広いことから遺構検出作業は難航した。試掘調査時に確認されていた遺構の他に、住居址、土坑が検出された。当初遺構の分布が薄いと思われた台地平坦面にも数多くの土坑が検出された。調査区内全体の遺構確認調査を継続して行なうことは困難であると判断し、南斜面の遺構の調査を遺構検出作業と並行して行なうこととした。本格的に遺構の調査にはいったのは10月の終りからである。調査は台地南

斜面から開始し、住居址の調査を先行させた。南斜面の遺構調査がほぼ完了したのは1月である。11月末より調査現場内に霜がたつようになり、12月にはいるとシートを重ね掛けしても、地表面から数cm範囲で土が凍りつき、作業効率は著しく低下した。霜は遺構の壁面を崩し、午前中に搔き取った霜が、午後3時過ぎには再びたちじめた。また出土状況の記録のため遺物を現状のまま残すと、次の日には土器や粘板岩製の打製石斧は破碎している有様であった。このため出土状況の記録は最低限にとどめざるをえず、多くの遺物については写真記録のみとなつた。以後、霜と凍った土、降雪に悩まされ続ける発掘調査が続き、発掘作業員にとっては劣悪な労働条件となつた。雪が積った翌日は、作業現場の雪かきから調査が開始された。冬季作業の様子は、新聞でも報道されている。

遺構の記録は、写真記録と図面により行なつた。図面については、大部分航空写真測量によつて行ない、遺物出土状況については調査員、調査補助員が図面を作成した。現地における調査が終了したのは、2月5日である。

報告書の作成作業については雨天などをを利用して、調査期間中から開始したが、本格的に整理執筆作業にはいったのは2月からである。今回の報告においては、遺跡内容の概略を紹介できるのみで、本報告については後日を期したい。

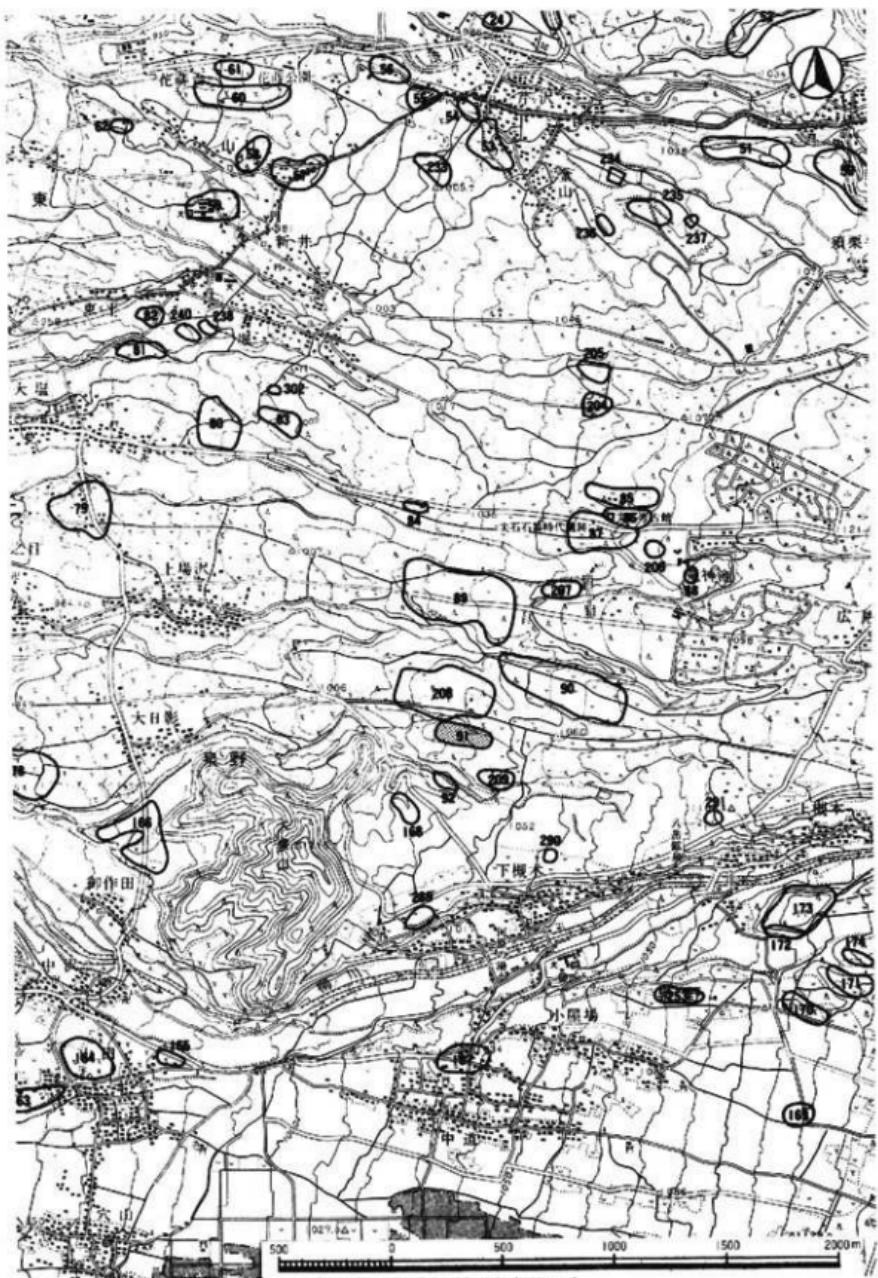
第III章 遺跡の位置と環境

第1節 周辺の遺跡

稗田頭A遺跡の周辺は、大小様々な遺跡の立地する遺跡集中地域である。規模が大きいと昔わられる遺跡は、稗田頭A遺跡（第1図 茅野市遺跡台帳 No.91）の北に分布する。北の谷をはさんだ台地上に金堀場遺跡（No.208）があり、さらに北に向って台地ごとに、鶴田遺跡（No.90）、新水掛A遺跡（No.89）、尖石遺跡（No.87）、与助尾根遺跡（No.85）が分布している。これらの遺跡のうち、調査が行なわれ集落址であることが確認されている遺跡は、与助尾根遺跡、尖石遺跡、鶴田遺跡の3遺跡である。茅野市史においては尖石遺跡、与助尾根遺跡は与助尾根南遺跡（No.86）、竜神平遺跡（No.206）、竜神平下遺跡（No.88）とともに一群を成し、金堀場遺跡、鶴田遺跡、中原遺跡（No.92）、上見遺跡（No.168）が稗田頭A遺跡、稗田頭B遺跡（No.209）とともに一群を形成していた可能性を指摘している。遺跡間の関係の解明は発掘調査に待たれる部分が多いが、稗田頭A遺跡周辺の遺跡を概観しておこうと思う。

先土器時代の遺跡には、上見遺跡、鶴田遺跡、稗田頭B遺跡がある。出土した遺物はナイフ形石器で、上見遺跡では遺物ブロックが検出されている。

稗田頭A遺跡周辺で確認された最も古い縄文時代遺跡は、金堀場遺跡である。有茎尖頭器が採



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

集されているが、詳細は未発掘であるため不明である。遺跡内容が確認された遺跡で早い時期に集落が形成されたのは中原遺跡である。前期末から前期初頭の竪穴住居址2基が重複していた。

前期初頭以後に集落址の断絶期があり、次に集落が営まれたのは、前期末から中期初頭の時期である。中期初頭の居住遺構としては中原遺跡の大形竪穴住居址1基のみであるが、竪穴式住居以外の遺構が検出された遺跡が存在する。鴨田遺跡からは、前期末から中期初頭の土坑群が台地中央の平坦部から検出され、上見遺跡では前期末から中期初頭の土坑群と時期不明の陥穴が検出された。中期初頭の遺物は、稗田頭B遺跡、金渕場遺跡とともに、稗田頭A遺跡でも採集されており、各遺跡の遺構、遺物の内容が判明すれば中期初頭の遺跡群の構成を考える上で大きな手がかりが得られるであろう。

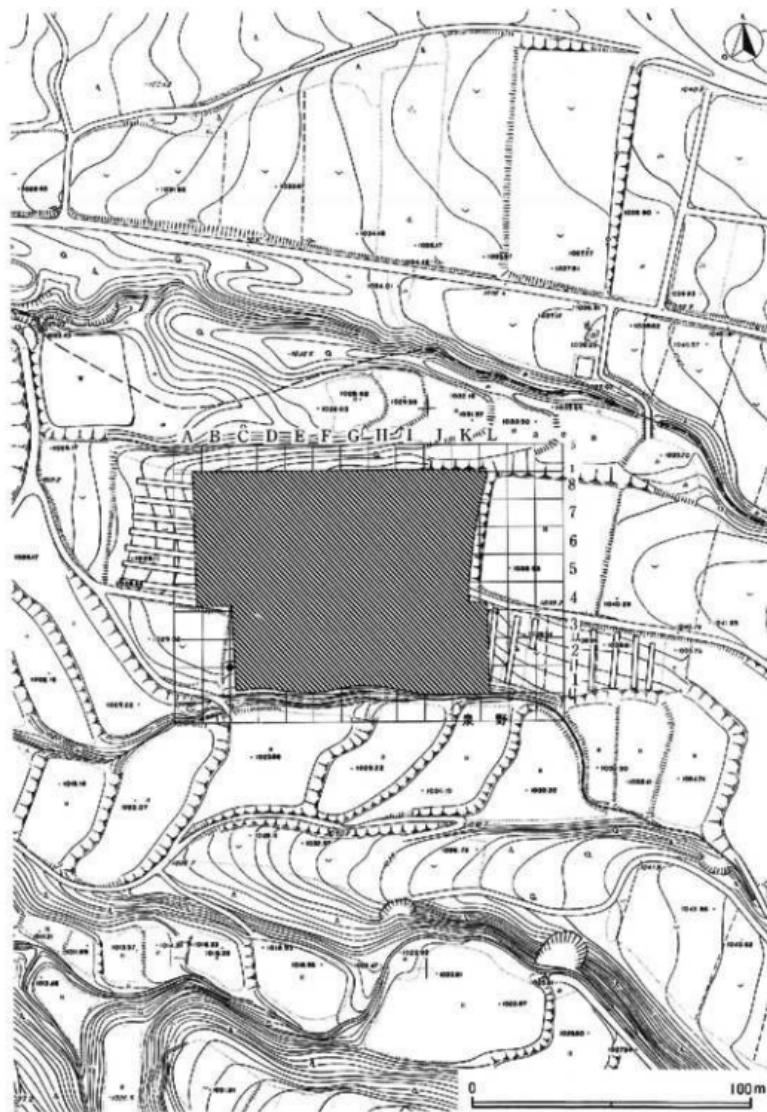
中期前半猪沢式期には、鴨田遺跡で竪穴住居が2軒営まれた。中期中葉になると竪穴住居址の検出はなく集落址の存在は明らかになっていないが、鴨田遺跡、金渕場遺跡からは藤内式土器、井戸尻式土器が採集されている。

中期後半曾利I式期には鴨田遺跡に集落が営まれる。鴨田遺跡からは曾利III式期、曾利IV・V式期の竪穴住居址が1基づつ検出され、その全容は不明ながら集落が存在していたことが解っている。また鴨田遺跡では、後期前半堀之内I式期の集落址とともに、集落と沢一筋おいた地点において、中期末、後期初頭の方形柱穴列、上坑、焼上址からなる遺構群が調査されている。

第2節 自然環境と遺跡の層序

稗田頭A遺跡は、長野県茅野市泉野下樋木に所在する。八ヶ岳西南麓の地形的特徴である、東西にのびる細長い台地上に立地する集落址である。この台地は1080m付近で北側の台地と分岐し、さらに標高1050m付近で南側の台地と分岐したもので、標高1030m付近が台地先端部である。台地先端部の西側はなだらかな傾斜面を経て、大泉山との間に形成された谷に落ち込んでいく（第1図）。この谷を中心に、稗田頭A遺跡のある台地の南には瘦尾根状の台地が続き、北には比較的広い平坦面をもつ台地が続いている（第2図）。谷と台地先端部の比高差は、現地形で約30mである。稗田頭A遺跡のある台地の北斜面は急傾斜面であるが、南斜面は比較的緩い斜面が15mほど続き、そこから谷に向って急に落ち込む地形となっている。調査区J3グリッド付近には南側の谷に向う浅い谷状地形がある。台地平坦面と北の谷との比高差は約7m、南の谷との比高差は、約10mである。南北の二つの谷には現在細い沢が流れているが、水量はあまり多くない。

調査区の基本層序は、第3図に示した通りである。J3c2グリッド東壁の第1層は道路下の土層である。第3層と第4層は細い堰の覆土である。この堰は道路に沿って台地先端に向い流れ下っている。堰内より平安時代の土師器が出上したことから、調査区の東側に平安時代の遺跡が残されている可能性がある。試掘調査時にも、今回遺構が発見されなかった調査区東側L3グリッド付近



第2図 遺跡周辺の地形と発掘区域 (1/2,000)

で灰釉陶器が表面採集されている。第4層、第5層は焼土ブロック、焼土粒子を含む土層である。焼上が残された時期については不明である。遺構確認面は、漸移層である第9層上面に設定した。第10層は黄褐色ローム層である。ローム層は台地平坦面では厚く堆積しているが斜面では流失し、漸移層直下に白黄色砂質土が堆積している。

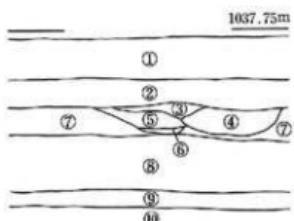
J3c2グリッド東壁土層説明

- ①茶褐色土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。ローム粒子、砂利を含む。
- ②黒褐色土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。5mm以下の炭化物、4mm以下の礫を少量含む。
- ③茶褐色土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。5mm以下の炭化物、1cm以下の焼土粒子を多く含む。
- ④灰色砂質土
- ⑤焼土 砂と③の混合土層。2mm以下の炭化物を少量含む。
- ⑥暗褐色土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。2mm以下の焼土を多く含む他、1mm以下の微細な炭化物が稀に含まれる。
- ⑦暗褐色土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。5mm以下の白色礫、黄色礫を少量含む他、微細な炭化物粒子を少量含む。
- ⑧暗褐色土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。4mm以下の白色礫、黄色礫を少量含む。
- ⑨暗黃褐色土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。⑩層がブロック状に含まれる。2mm以下の白色礫、赤色スコリアが少量含まれる。
- ⑩暗黃褐色土 粒子は粗く縮りはある。粘性は弱い。1cm以下の白色礫、黄色礫を少量含む。

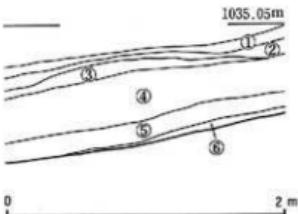
K4c3グリッド西壁土層説明

- ①暗褐色土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。耕土層。
- ②茶褐色土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。5mm以下の黄色礫、白色礫を多く含む他、マルチ、灰青色礫を少量含む。
- ③黒褐色土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。5mm以下の黄色礫、白色礫、3mm以下の灰青色礫を多く含む。
- ④暗褐色土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。1cm以下の黄色礫、白色礫を多く含む。グリッド東壁⑧層に類似する。含まれる礫が大きく、量も多い。
- ⑤暗黃褐色土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。2cm以下の黄色礫、白色礫を少量含む。グリッド東壁⑨層に類似する。
- ⑥白黄色砂質土 粒子は細かく縮りはある。粘性は弱い。1cm以下の白色礫、黑色礫、灰青色礫を少量含む。

J 3 c 2 東壁



K 4 c 3 東壁

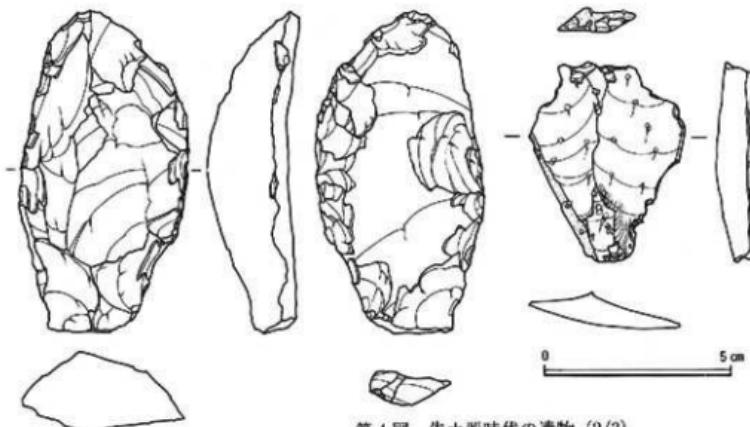


第3図 遺跡の層序 (1/40)

第IV章 遺構と遺物

第1節 先土器時代の遺物

先土器時代の遺物は尖頭器1点、剝片1点があり、出土層位は第8層の漸移層上部である。尖頭器としたものは縄文時代のスクレイパーである可能性を残すが、調整加工の特徴などから先土器時代の遺物とした。チャートを用いており、分厚い剝片を素材としている。平面形状は右側縁が張り出し、稜線は左に偏っている。断面は半円形を呈し、基部に素材剝片の打面が残されている。縦長剝片は第8号住居址覆土から出土した。剝片の石材は球夥を多く含む黒曜石である。尖頭器の出土した地点の周辺の深掘り調査を行なったが、石器ブロックなどの遺構は検出されなかった。



第4図 先土器時代の遺物 (2/3)

第2節 繩文時代の遺構と遺物

(1) 住居址

第1号住居址

台地平坦部南西隅に位置する。住居址の南端から台地南斜面にかかる場所である。平面形が明らかでなく、床面に高低差がみられることから、住居址2基以上が重複しているものと考えられる（図版1）。主柱穴配置は、中央の5本主柱穴と4本主柱穴が把握できるが、他の主柱穴配置は不明である（第16図）。5本主柱穴の床面からの深さは、最大88cm、最小71cmである。柱穴の直径は、約30cm前後で細く深い柱穴により構成されている。

炉址は3基検出され、いずれも地床炉である。5本主柱穴に伴う炉址は、主柱穴のはば中央に位置し、深さ約20cmの浅い掘方が検出された。

5本主柱穴の住居址の主軸線上には、対ビットとみられる柱穴が検出された。

床面は全体に軟弱で、周溝はみられない。壁面の立上がりは北東部分で約30cmの壁高があるが、他の部分では不明瞭である。

後世の擾乱層を除けば、住居址覆土は2層に分層できた。遺物の所属層位は不明なものが多い。遺物は多量に出土したが、器形復元できる土器はなく大部分が破片となって出土した。主体的に出土した遺物は前期末から中期初頭の土器である。覆土中には須賀式土器、曾利IV式土器、後期前半の土器が少量出土している。分層調査を行っていないことから、出土層位に偏りがあることは不明であるが、ベルトを取外す際に、層位別に遺物を取り上げたところ、覆土上位の土層である暗褐色土層では曾利IV式土器の出土量が多く、称名寺式土器、塙之内I式土器が伴っていた。なお3個体分以上の有孔鉢付土器の破片が出土した。赤く染られた土器片1点が出土しており、有孔鉢付土器と胎土の状態が似ている。所属時期は不明である。

石器は打製石斧、横刃型石器、石鎌、石錐、凹石、磨石、敲石、ピエスエスキューなどが多量に出土した。

中期初頭の土器には段階差がみられることから、2組の主柱穴は中期初頭の住居址であると考えられる。

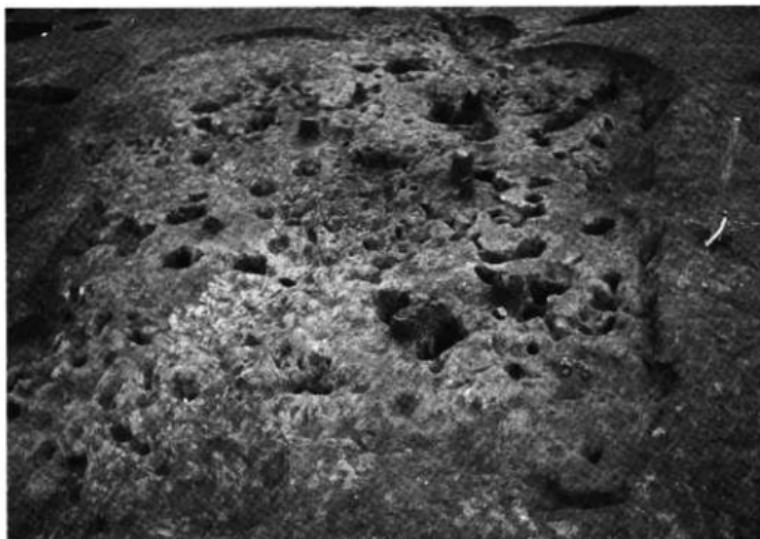
第2号住居址

台地平坦部と南斜面の境界に位置する。遺構の保存状態は良好である。

覆土は4層に分けられ、第3層がいわゆる三角堆土である。いずれの土層にも炭化物と焼土が含まれていた。炭化物と焼土粒子の大きさは、下位の土層ほど大きくなる傾向を示し、焼土の量は第3層で、炭化物は第2層で最も多い。第4層は焼土を極めて多く含む上層であり、炉の周辺にのみ認められ、炉の覆土を覆うように堆積していた。

平面形は隅丸五角形で、南側の主軸線上が張り出している（図版2）。東側の壁も張り出しているかのようにみえるが、南壁の張り出し方より緩やかである。北壁の主軸線上が若干張り出している。北壁の床面上約40cmに、礫が配置されていた（図版5）。礫は北壁より内側に並び、個々の礫は壁面に立てかけられたように、斜めの状態で検出された。

主柱穴は3本で南側の2本が約30cmと浅く、炉の北に位置する主柱穴の深さは76cmある。柱穴の平面形は、南東の2本が横円形に近いが、北の主柱穴は径約30cmの円形である。南西と北の主柱穴の掘方では、住居址内側に面する壁が傾斜している。北の主柱穴は南方向に傾き、南西の主柱穴は南東に向いて傾いている。床面、住居址外側からも柱穴が検出されなかったことから、3本主柱穴であると判断した。南壁際の浅い主柱穴に接するように、径約30cmほどの浅いビットがみられた。南東のビット内には柱穴を埋めるほどの礫が入っていた（図版4）。



図版1 第1号住居址（南から）

炉址は主軸線上北側に位置する。炉壺方北側の炉石以外はすべて抜取られていた（図版3）。残されていた炉石の出土状況から推定すると、板状の礫1枚で炉の1辺を構成し、板状礫の間に拳大的な礫をつめた石圓炉であったと思われる。炉石は掘方に沿って、ほぼ垂直に立てられていた。炉底はよく焼けており、硬く縮まっていたが、焼土の堆積は薄く、約6cmであった。炉址覆土上面から、礫と土器片がまとまって出土した。

床面は、硬く縮っており、一部に火を受けたと思われる部分がある。周溝は全周し、深くしつかりしているが、南壁下においては不明瞭である。この部分に、深さ10cmほどの横円形のビット

が検出された。楕円形ピットの間の壁面が一段張り出していることから、出入口方向は南側であったと推定される。

遺物は覆I中から多く出土し、床面に伴うものは少ない。土器は破片資料が多く、器形復元ができる土器は少なかった。わずかに炉址内から出土した土器が器形を推定させ得るものである。出土した土器は、梨久保式土器、新道式土器、曾利II式土器、III式、IV式、称名寺式併行の土器、堀之内I式土器が出土している。加曾利系の土器は曾利IV式土器とほぼ同じ量が出土している。微降起線が施される中期後半最終末の土器はわずかで、多くは腹部に2本1組の沈線を施す土器である。中に沈線で分割された縄文帯内に波状沈線を施したものがある。出土量が最も多いのは、曾利IV式土器と加曾利E式土器で、以下曾利II式土器、中期初頭に属す土器があり、新道式土器、後期初頭から前半に属す土器はごくわずかである。

比較的大形の土器片は、炉の周囲から出土した。曾利II式土器が多く、曾利IV式の小形土器も出土した。

石器は打製石斧、磨製石斧、凹石、磨石、ビエスエスキューが出土した。

土器の出土状況から曾利II式期から曾利IV式期に属する住居址であると考えられる。稗田頭A遺跡においては3本主柱穴の住居址は中期末葉に属すものが多く、土器の型式別の出土量を考えると曾利IV式期の住居址である可能性が高いと考えられるが、床面にともなう遺物が少ないことから、一時期に特定することができない。

第3号住居址

台地平坦面と南斜面の境界に位置する。

平面形は不明で、主柱穴配置もはっきりとはわからない。床面と考えた面は軟弱で周溝も検出されなかった。(図版6)

礫を伴う土坑が検出された他、住居址に類する施設がない。土坑の一部は上層断面観察の結果、住居址覆土とみられた土層を切っている。

遺構覆土は、自然堆積層である可能性が強い。以上の調査所見から、住居址として捉えることが難しいと思われる。

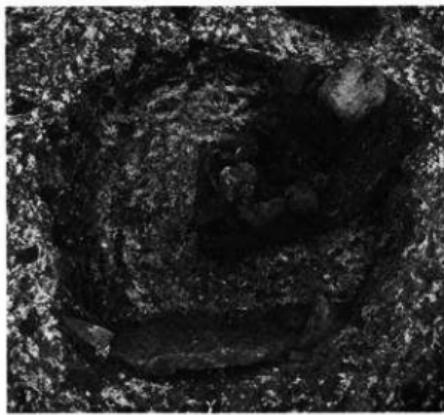
遺物は、擾乱層と自然堆積の漸移層の境界付近、および土坑内に多い。土器は梨久保式土器、猪沢式土器、曾利III式、IV式土器、地文に縄文をもつ加曾利E系の土器、堀之内I式土器が出土している。器形が復元できる土器はなく、破片が主体である。出土量からみると、主体となるのは曾利IV式と加曾利E系の土器、次いで梨久保式土器が多く出土し、猪沢式土器、曾利III式土器、堀之内I式土器が少量出土している。型式不明の土器も多い。

石器は打製石斧、石鎌、石鎌ブランク、石錐、ビエスエスキューが出土した。

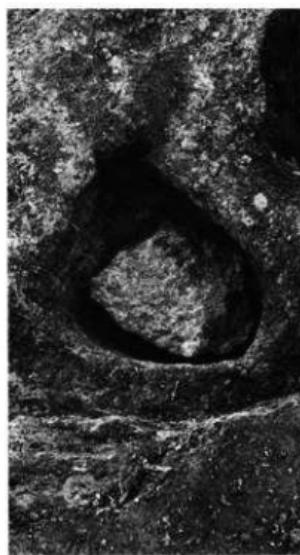
土製円板が6点出土している。いずれも住居址として捉えた範囲内からの出土で、土坑に伴うものではない。



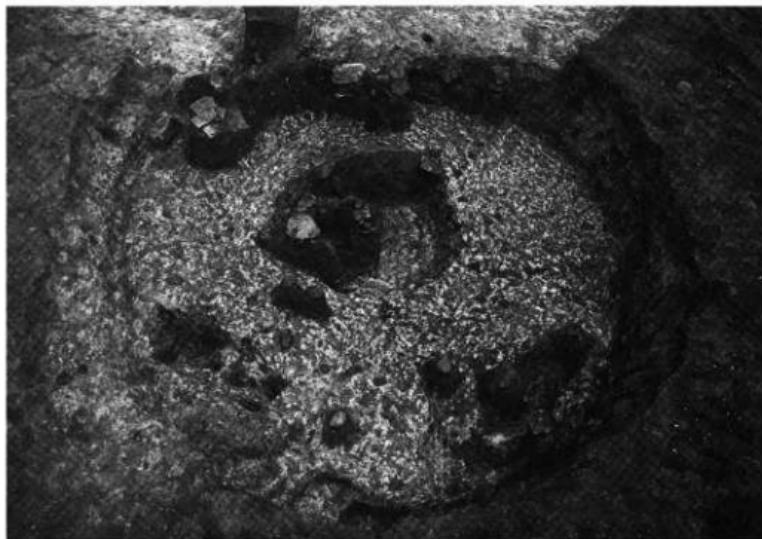
図版2 第2号住居址（東から）



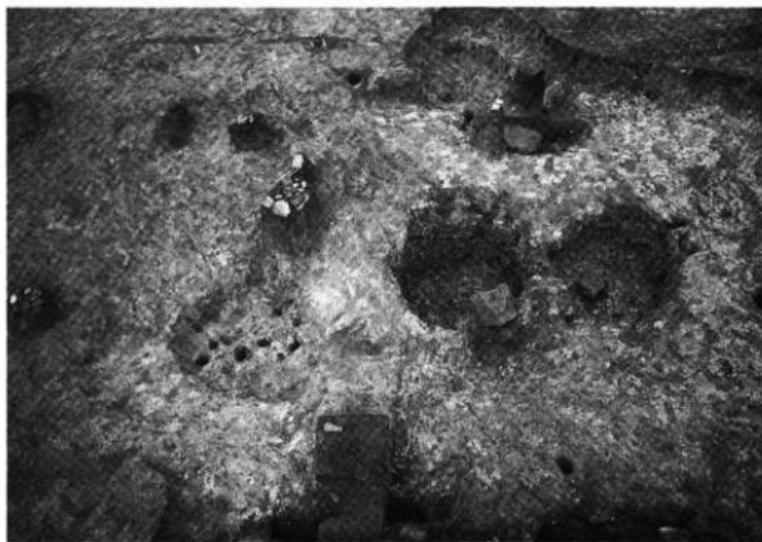
図版3 第2号住居址炉址（北から）



図版4 第2号住居址南東柱穴内砾
(南から)



図版5 第2号住居址遺物分布（南から）



図版6 第3号住居址（南から）

第4号住居址

台地南斜面中ほどに位置する。急傾斜面であるため、住居址の遺存状態は悪く、住居北半約1/3が遺存していたに過ぎない。

平面形は、遺存部分から推定すると円形であると思われるが、はっきりしない（図版7）。主柱穴も不明瞭で、3本確認された以外は不明である。柱穴の規模は小さく、深さ37cmから15cm径約20cm以下の細い柱穴である。

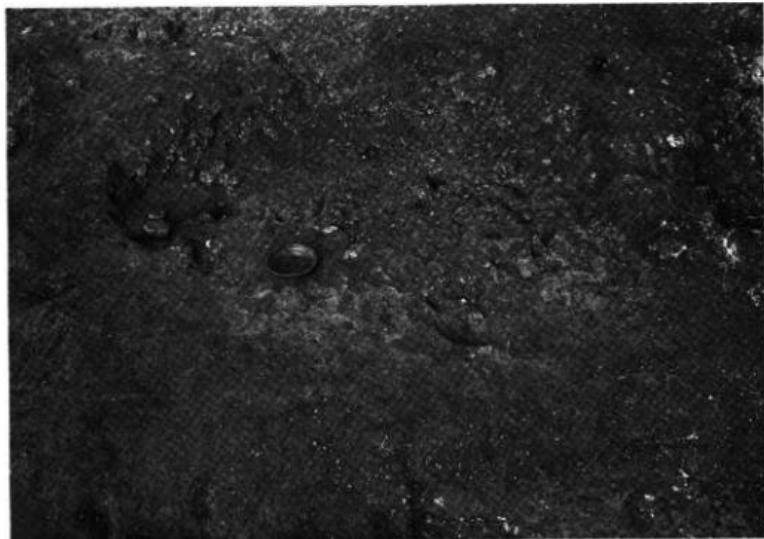
炉址は方形の端方をもつ地床炉で、土器が埋設されていた（図版8）。推定主軸線の北寄りに位置している。炉体土器には土器口縁部から頭部下の部分を用いており、土器の口縁部は、住居址の床面堀方から約7cm上位になるように、埋設されていた。土器の周間から焼土が検出された。

床面は硬く締っており、周溝は検出されなかった。炉址の位置と主柱穴配置から推定すると、出入口方向は南である。

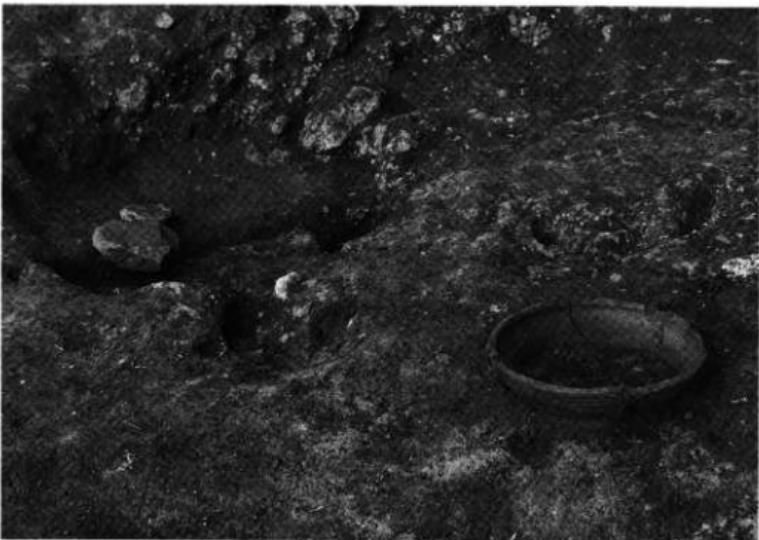
遺物は少ない。炉体土器以外は器形復元できるもののがなく、破片資料が主体である。出土土器は中期初頭梨久保式土器、猪沢式土器、中期後半の土器が出上している。炉体土器は、偏平な隆帯による楕円区画で構成され、内部に2条のベン先状刺突が這っている。角押文はみられないが、口縁部の横位長楕円区画、隆帯の特徴から猪沢式土器であると考えられる。

石器は打製石斧、石鎌、石錐、凹石、ビエスエスキューが出土した。

炉体土器から、猪沢式期の住居址であると考えられる。



図版7 第4号住居址（南から）



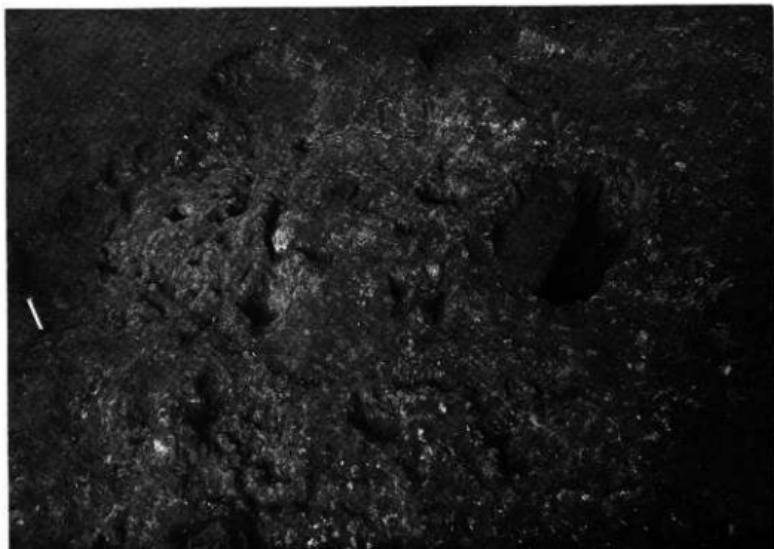
図版8 第4号住居址炉址（南から）

第5号住居址

台地南斜面上部に位置する。急傾斜面であるため、住居址の北側約1/3が遺存していた。平面形は遺存部分からみると、円形であると考えられる（図版9）。主柱穴は2本確認できる。炉址は土器埋設地床がで、推定主軸線からやや東に寄った位置に設けられている。炉体土器は、口縁部から胴部上半を用いていた。土器口縁部は住居址床面から約5cmほど上位になるように埋設されていた。土器の周囲からわずかではあるが焼上が検出された。床面は硬く締っており、周溝は検出されなかった。炉址の位置と主柱穴の配置から、出入口は南にあったと推定される。

遺物は少ない。器形が復元できる土器は炉体土器のみで、破片資料が主体である。炉体土器は、口縁部が丸みをもつ隆帯により4分割されている。4分割された口唇部は、波状の隆帯文がほどこされた部分と角押文2条のみで梢円区画が施文される部分が交互に現れる。波状隆帯の下には2条1組の角押文が施され梢円区画を構成している。角押文は幅の広いものと狭いものの2種が使い分けられ、梢円区画の内側は、幅の狭い角押文である。区画内には横位波状構成の角押文が施されている。口縁部の縦位隆帯の下には、鎌手状の隆帯文が施されている。文様構成などから、猪沢式土器であると考えられる。覆土から出土した土器には、猪沢式土器、中期初頭梨久保式土器、曾利IV式土器がある。出土量は中期初頭に属する土器が最も多い。有孔鉢付土器の破片1点が出土しているが、小破片であるため時期は不明である。石器にはビエスエスキューがある。

炉体土器から、猪沢式期の住居址であると考えられる。



図版9 第5号住居址（南から）

第6号住居址

台地平坦面の斜面近くに位置する。

平面形は隅丸方形に近いが、主柱穴配置を考えると隅丸五角形と考えた方が良いと思われる。主柱穴は4本主柱穴である（第5図）。南側の2本の主柱穴の内側に貼床がなされた柱穴が2本検出されたことから、住居址が一度拡張されたと考えられる。柱穴の深さは105cmから61cmあり、長径約50cmの楕円形である。またやや細目の柱穴が4本主柱穴をなすが、主軸線の方向は南南東で、平面形が楕円形の4本主柱穴の主軸と若干ずれがある。

炉址は1基で、炉石が抜き取られていた。炉石の抜き取り痕からみると、偏平な礫を平に据えた方形の石圓炉であったと考えられる。炉底は焼けていたが、焼土の堆積はみられなかった。

床面は住居址中央でややくぼんでおり、全体に南に傾斜している。埋甕2基検出され、いずれも正位に埋設されていた。

覆土は3層に分層され、壁際のロームブロックを含む層を除き、炭化物を少量含んでいた。堆積状況から、自然堆積であると思われる。

遺物は多量に出土し、器形復元が可能な土器は少ない。住居址南側の床面上約10cmから40cmの範囲から出土したが、床面上から出土した土器もある。覆土上部から出土した土器で器形復元が可能なものには、加曾利E系の深鉢と口縁部に沈線を2条巡らす浅鉢がある。深鉢は住居址確認面から出土した土器で、横倒しの状態で出土した（図版10）。微隆帯によって区画された、対

向U字交錯文を施された土器で、6号住居址出土土器の中で最も出土位置が高い。

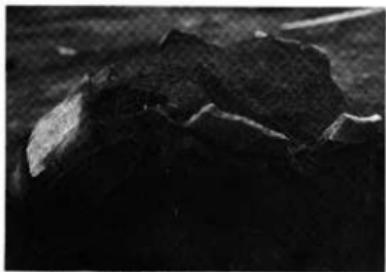
覆土内の加曾利E系の土器は、胴部のみ遺存した深鉢が出土している。口縁部には隆帯による長方形区画と渦巻文が施され、胴部には2本1組の沈線が垂下し、胴部を分割している。沈線間は地文が施されない磨消帶となっている。

破片資料では曾利IV式土器と加曾利E系の土器が主体で、中期初頭、後期前半の土器が含まれている。曾利IV式土器の胴部破片では区画を構成する文様は沈線が主体で、低隆帯による土器は少ない。地文には、櫛状工具による条線とヘラ状工具による沈線によるものがあるが、主体的に出土するのは前者である。加曾利E系の土器は、胴部破片が多く、口縁部破片では隆帯により区画されるものがみられる。後期前半の土器は、堀之内I式土器が主体であるが、わずかに称名寺式土器に類似する土器、堀之内II式土器がある。

床面に伴う土器には、加曾利E系の深鉢と埋甕、曾利IV式土器を用いた埋甕がある。加曾利E系土器の深鉢は口縁部が隆帯により長方形に区画され、部分的に渦巻文が配置される。胴部は2本1組の沈線により分割される。加曾利E系の深鉢を用いた埋甕は、土器の胴部を用いており、地文は繩文で2条1組の沈線により胴部が分割されている。分割された区画内には波状沈線が施されている。曾利系土器による埋甕は、胴部から底部にかけての部分が埋甕として用いられている(図版12)。底部は完全に遺存していた。櫛状工具による地文の上に、両脇にナデが加えられた低隆帯により渦巻文が描かれた土器である。文様の特徴から曾利IV式土器であると考えられるが、文様構成から唐草文系土器と近縁関係にあるとされている土器である(茅野市教育委員会1990)。

石器は打製石斧、横刃型石器、石鎌、石鋸ブランク、凹石、磨石、ビエスエスキースが出土した。垂飾品1点が覆土内から出土している。

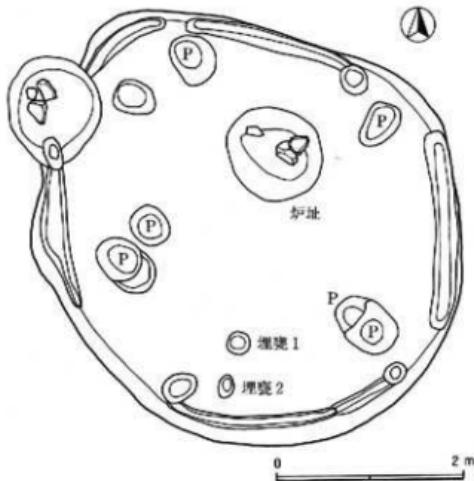
埋甕と覆土出土の土器から、曾利IV式期の住居址であると考えられる。



図版10 第6号住居址土器出土状況(1)



図版11 第6号住居址土器出土状況(2)



第5図 第6号住居址概略平面図 (1/60)



図版12 第6号住居址埋甕2

第7号住居址

台地平坦部と南斜面の境界に位置する。道路と南斜面の畠との境であったため、遺存状態はよくない。

平面形はほぼ円形である。主柱穴は4本であると思われる。主柱穴の平面形は円形で、深さは48cmから32cm、径約40cmから30cmである。いずれの主柱穴も壁際寄っている(第6図)。

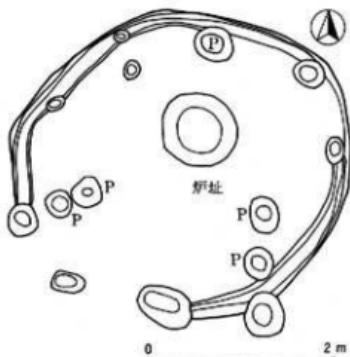
炉址は石圓炉であったと思われるが、炉石はすべて抜き取られている。炉石の抜き取り痕から偏平な礫を平に据え、方形に配置したものと思われる。炉底は焼けていたが、焼土の堆積はみられなかった。

主柱穴の位置と炉址の位置から、出入口は南東にあったと推定され、対ビットが検出されている。床面は中央がくぼみ、全体が出入口の方向に向って僅かに傾斜している。周溝は出入口の部分と北東壁面下で切れている。出入口の東よりの壁際から、礫2個が検出されている。

出土遺物は少ない。覆土からは中期初頭、曾利III式、IV式土器、堀之内I式土器が出土したが、主体は曾利IV式土器である。器形復元が可能な土器には、床面直上から検出された、曾利IV式土器1個体があるのみである(図版13)。

石器は石鎌1点が確認されたのみである。

出土土器から、曾利IV式期の住居址であると考えられる。



第6図 第7号住居地概略平面図 (1/60)



図版13 第7号住居出土器出土状況

第8号住居共

第7号住居地の東に位置し、台地平坦面と南斜面の境界に位置している。遺存状態は、あまり良くない。

平面形は、壁の遺存している部分から推定すると、多角形を呈すると思われる。主柱穴は、変則的な3本主柱穴と5本主柱穴の2組の主柱穴配置がみられる。5本主柱穴（第7図P1）は北壁際の楕円形の柱穴から、壁沿いに巡る細い柱穴であり、3本配置（第7図P2）の柱穴は一回り大きい。深さは53cmから42cmと一定しているが、平面形には円形と楕円形がある。炉址の東西の壁際に掘り込まれているピットと住居址南壁際のピットが、楕円形で通常の主柱穴のあり方とは異なる。平面円形の柱穴が主柱穴で、平面楕円形の柱穴が壁柱穴であると捉えることもできる。

炉址は主軸線上やや北寄りに位置している。炉石はすべて抜き取られており、抜取り痕から、炉石を堀方の縁に平に並べて配置したものであると思われる。炉址覆土には焼土粒子が含まれ、炉底は焼けていたが、焼土の堆積はみられなかった。床面は比較的軟弱で、やや南に傾斜している。周溝は西壁下に検出されたが、他の部分でははっきりしない。住居址南側の方形のピットは上面には貼床が設けられていた。このピットからは曾利IV式土器が出土している。埋甕かと思われたが土器がこわれた状態で出土した点で他の住居址から検出された埋甕とは異なっている。

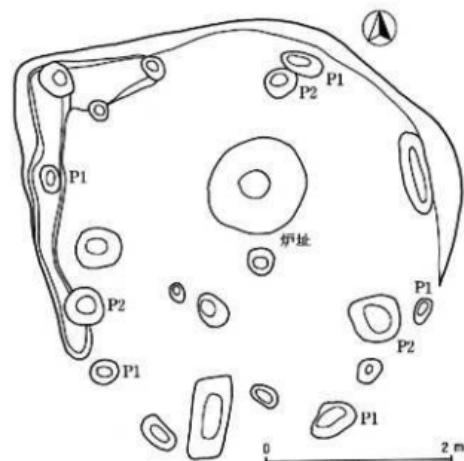
遺物の出土量は少ない。器形復元可能な土器が炉址北側と炉の上面から出土している。炉の上面から出土した土器は、床面上約20cmの覆土中から出土した。口縁部に1条の沈線をひき、胴部に沈線による「7」区画文と矢羽根状構成の条線文がまばらに施された土器である。炉址の北側の土器は、床面上約35cmの覆土中から出土した。文様構成は炉址上面の土器と同じで、沈線による区画文をもつ土器である。覆土出土の破片資料は少なく、曾利III式、IV式土器がある。破片資

料の中に櫛状工具による列点文を地文とする土器がある。列点文は綾杉状構成をとらず、むしろ縦文に近い効果をねらったものと思われる。また低隆帯による区画文が施されるが、隆帯の脇にナデではなく、沈線が施される土器が出土している。

南壁際の方形ピットから出土した土器は、胴部が両脇にナデが加えられた低隆帯による「7」区画文で構成され、区内にはヘラ状工具による「ハ」の字状沈線が施されている。

石器では磨製石斧、凹石が出土した。

出土土器から曾利IV式期の住居址であると考えられるが、低隆帯が消失し沈線で区画を構成すること、条線文もまばらで崩れていますことから、曾利IV式でも後出の様相を呈している。



第7図 第8号住居址概略平面図 (1/60)



図版14 第8号住居址
土器出土状況

第10号住居址

台地南斜面上部に位置する。遺存状態は悪く主柱穴と炉址が検出できたのみである。第19号住居址と重複する(第16図)。

主柱穴は4本で認められた。柱穴の規模は当遺跡の中では比較的大きな部類に属し平面形は円形で径約60cm、深さ60cmから46cmである。炉址は地床炉で、主軸線上やや北寄りに位置する。主柱穴配置と炉址の位置から、出入口方向は南であると推定される。

出土遺物は少ない。柱穴覆土から中期後半曾利系の土器と後期前半の土器片が出土したが、住居址の時期決定の基準とするにはあまりにも少量であった。住居址範囲内から底部破片と曾利IV式土器片1点が出土した。石器は出土しなかった。

出土土器から中期後半の住居址であると考えられるが、所属時期は不明である。

第11号住居址

台地南斜面下位に位置する。斜面に立地するため遺存状態は悪く、住居址の北半約1/2が残されていた。第12号、第13号住居址と重複する住居址である（第8図）。

平面形は、隅丸方形か隅丸五角形であると推定される。主柱穴は4本で、壁際に設けられていた。平面形は円形で、径40cm、深さは44cmから21cmである。

炉址は、主軸線上北寄りに位置し、偏平な一枚石が壌方に沿って立てられていた。炉石の検出状況と抜き取り痕からみて、偏平で大きな一枚石を方形に組んだ炉であったと考えられる。

床面は硬く締っており第12号住居址と第13号住居址の上に貼床を設けていた。貼床の存在から、重複する3基のうち、第11号住居址が最も新しい住居址であると考えられる。周溝は床面上では全周するが、貼床面では周溝の識別ができなかった。第13号住居址覆土上に設けられた貼床面から底部が穿孔された埋甕が検出された。主柱穴配置と炉址の位置関係、埋甕の位置から、出入口は南東方向にあったと推定できる。

住居址の遺存状態に比べ遺物は比較的多く出土した。炉址南東からは、礫とともに土器1個体が出土した（図版17）。口縁部に低隆帯による渦巻文が5単位配され、渦巻文は沈線で連結されている。胴部は渦巻文と接続する低隆帯により、やはり5単位に分割されている。低隆帯は2本1組であるが、1単位だけが1本の低隆帯で区画文を構成している。2本1組の低隆帯の間は、櫛状工具による条線文が充填され両脇にナデが加えられている。胴部の区画内には、櫛状工具による矢羽根状構成の条線文と波状沈線が施されている。渦巻文により口縁部文様帯が構成される点で曾利III式土器の特徴をもつが、口縁部区画が一部沈線に変り、地文である条線が矢羽根状構成をとるなど曾利IV式土器の要素を併せもつ土器である。覆土からは前期末、中期初頭の土器片が少量出土したが、主体をなすのは曾利III式、IV式土器片である。加曾利E系土器がわずかに出土した。

石器は横刃型石器、石鎌、石錐、ビエスエスキューが出土した。

出土土器から曾利III式期の住居址であると考えられる。

第12号、13号住居址

台地南斜面下位に位置する。遺存状況は悪い。第11号住居址と重複する。

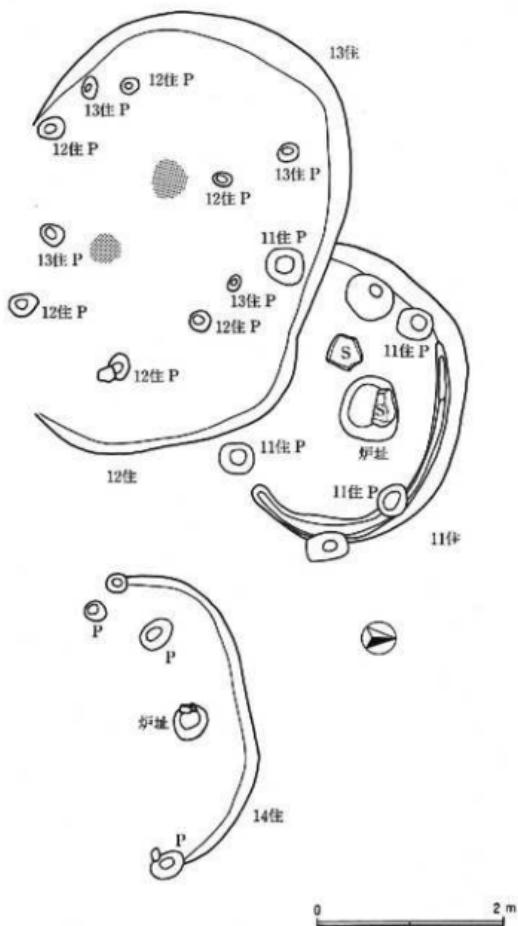
主柱穴配置は4本主柱穴と6本主柱穴が検出された（第8図）。住居址平面形と主柱穴の位置関係から、4本主柱穴は第13号住居址の柱穴で、6本主柱穴が第12号住居址の主柱穴であると考えられる。炉址は不明である。床面は硬く締っており、周溝は検出されない。2基の住居址の床面の高さには頗著な差はみられないが、第13号住居址の床面の方がやや低くなっている。炉址は2基検出され、いずれも地床炉であった。12号住居址の炉址には、厚さ6cmの焼土が堆積していた。

遺物は少量出土した。第12号住居址からは中期初頭の土器が主体となって出土し、第13号住居址からは少量ではあるが、猪汎式土器が主体となって出土した。浅鉢破片が出土している。

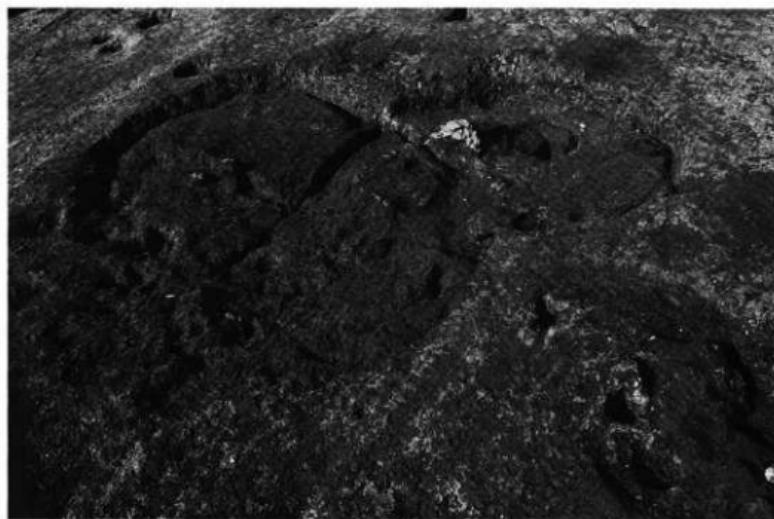
石器は打製石斧、石鎌ブランク、石錐、石皿、凹石、ビエスエスキューが出土した他、覆土中

から磨製石鋸1点が出土した。

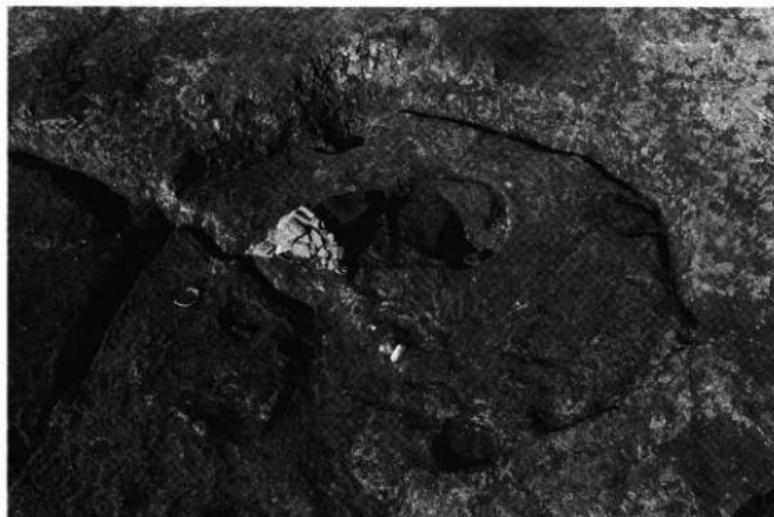
出土土器から第12号住居址が中期初頭に、猪沢式期に第13号住居址が構築されたものと考えられる。



第8図 第11号、12号、13号、14号住居址概略平面図 (1/60)



図版15 第11号、12号、13号、14号住居址 (南東から)



図版16 第11号住居址貼床検出状況 (南東から)



図版17 第11号住居址土器出土状況（東から）

第14号住居址

台地南斜面下位に位置する。住居址の遺存状態は悪く、住居址北半約1/3が残されていた。平面形は隅丸方形か隅丸五角形であると推定される（第8図）。主柱穴は3本確認されているが、全体の配置からみて、4本主柱穴であったと考えるのが妥当である。主柱穴の深さが30cm前後と比較的浅いため、南西隅の主柱穴は検出できなかつたと考えられる。

炉址とみられる掘り込みが、住居址北壁近くから検出された。円形の場方をもち、主柱穴の範囲外になる点が他の住居址と異なっている。覆土内から焼土ブロックが検出されたことから炉址としたが、炉底に火を受けた痕跡がなく、不明瞭な部分を残している。周溝は検出されず、床面は硬く締っていた。主柱穴の配置と炉址の位置から、出入口は住居址南側に設けられていたと考えられる。

覆土は2層に分層され、上層には焼土ブロックの集中箇所が含まれる。遺物は少量出土したのみである。土器は破片資料が少量出土した。十三菩提式併行の土器である。炉址南側の床面直上から、破損した石皿3点出土したが、うち2点は接合し、残る1点も同一個体であると考えられる。

出土土器から前期末に属する住居址であると考えられる。

第17号住居址

台地平坦面の南側に位置する。遺存状態は良好である。

平面形は円形で、主柱穴は4本である（図版18）。平面形は梢円形で、径30cm、深さは73cmから52cmの細く深い主柱穴である。

炉址は、主軸線上北寄りに位置し、炉石はすべて抜き取られていた。炉址上端に抜き取り痕が観察されないことから、炉石を堀方に沿って立てる石碑であったと推定される。炉の一部はピットにより破壊されていた。が底は焼けていたが焼土の堆積はみられなかった。

床面は、軟弱である。周溝の幅は約20cmとやや広めである。周溝は全周するが、南東壁下で判然としない。この部分に浅いピット2基が、主軸線をはさむ位置に設けられ、その内側から埋甕が検出された。埋甕は正位に埋設されていた。主軸線と炉の位置、2基の浅いピットと周溝の検出状況から住居の出入口は、南東方向に設けられていたと考えられる。

遺物は比較的多い。覆土出土の土器のうち器形復元できたものは1個体である。住居址南側の床上約20cmの覆土中から、焼土とともに検出された。焼土の厚さは約4cmで土器の上位にまで分布していた。口縁部は無文帯となり頸部に巡る低隆帯から胴部を分離する低隆帯が垂下する。区画内にはヘラ状工具により「ハ」の字状文が施されている。土器の特徴から曾利IV式土器であると考えられる。破片資料では前期から中期初頭にかけての上器、堀之内I式土器も少量出土したが、主体をなすのは曾利IV式、V式土器である。唐草文系の土器は極めて少なく、地文に繩状工具による条線を施す土器、ヘラ状工具により「ハ」の字状構成の沈線を施した土器および縄文を地文とする加曾利E系の土器がほぼ同じ量で出土している。胴部に結節縄文が施された土器が2点と少數はあるが出土している。地文に条線文を施す土器の区画文は、低隆帯によるものが主体であるが、沈線により区画を構成する土器も含まれている。ヘラ状工具による沈線を地文とする土器では、低隆帯で区画を構成する土器はわずかで、沈線によるものが多い。埋甕は口縁部、底部を欠く加曾利E系の土器である。底部は接合痕ではがれていた。

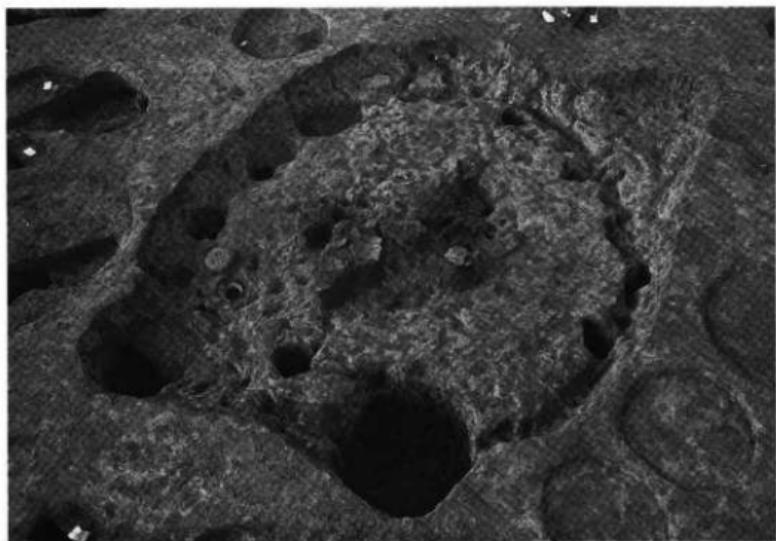
石器は打製石斧、横刃型石器、石錐ブランク、石錐、石皿、磨石、軽石製品、ビエスエスキューが出土した。床面直上から出土した石皿は、裏面が蜂の巣石となっていた。

出土土器から曾利IV式期の住居址であると考えられる。

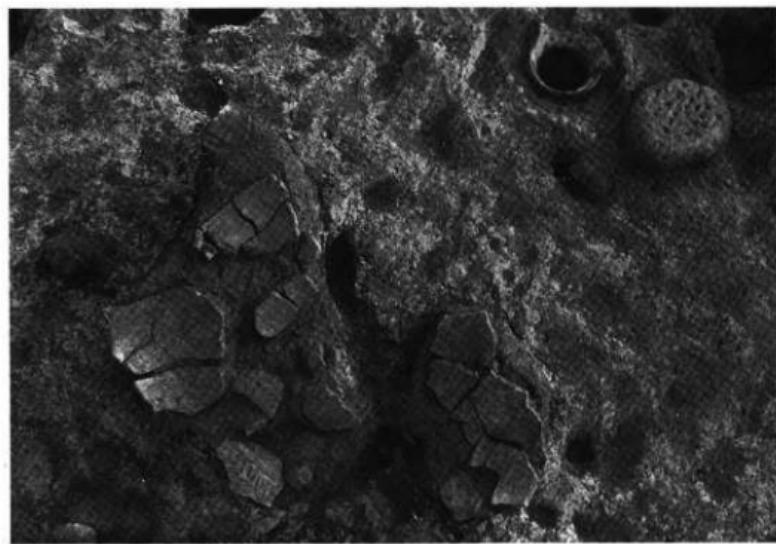
第18号住居址

台地平坦面の南側に位置する。東壁の一部が耕作による擾乱で壊されていた。

平面形は隅丸六角形である。主柱穴は4本で2組検出された（図版20）。北西、南西、南東の主柱穴で拡張された痕跡が認められた。住居址の主軸線上南側から、平面形が不整梢円形の掘り込みとピットが検出された。この住居址内ピットの上面にも貼床が認められなかつたことから、4本主柱穴に伴う遺構であると思われる。炉址は主軸線上や北寄りに位置し、炉石はすべて抜き取られていた。炉址覆土には焼土ブロックが含まれていたが、焼土はみられなかった。炉址南側



図版18 第17号住居址（南から）

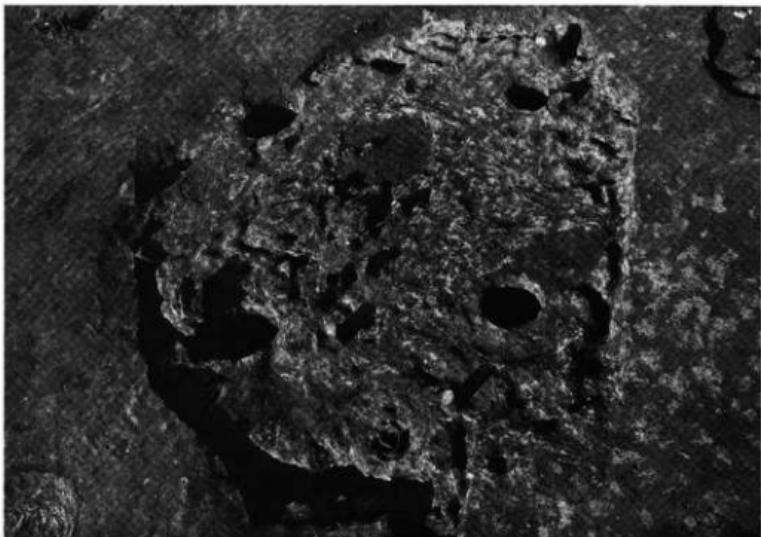


図版19 第17号住居址遺物出土状況（北から 右奥は埋甕）

床面から床面上約10cmにかけて焼土が堆積していた。焼土下の床面には、火を受けた痕跡はみられない。床面は黒色土と黄褐色ロームが斑状に混じり合っており、硬く締っている。周溝は、東壁下と西壁下から検出された。埋甕が住居址南壁下に設けられており、深鉢が正位に埋設されていた。住居址主軸と炉址の位置関係、埋甕の位置、ピットを伴う掘り込みの存在により、住居址の出入口は住居址主軸線上南側にあったと推定できる。

覆土の観察では住居址の重複関係は捉えられなかつたが、出土した遺物には時期差が認められる。出土土器のうち主体をなすのは、中期初頭の土器と中期末曾利IV式、V式土器である。1個体に復元しうる土器は、加曾利E系土器の深鉢と壺形土器ある。壺形土器は加曾利E系深鉢にくらべ上位から出土した。出土位置は、床面より15cmから27cmである。深鉢は住居址北東隅の主柱穴の東側の床面上約4cmから12cmの範囲から出土した。比較的小型の土器で、口縁が波状をなし、口縁部には低隆帯により輪円区画と渦巻文が配されている。胴部は粗い斜縄文と波状沈線が施された後、2本1組の沈線により区画されている。沈線間は磨り消されている。床面に伴う遺物には、曾利式土器を用いた埋甕と石皿がある。埋甕は2個体の土器を用いており、上位の土器は、沈線による崩れた区画内に、櫛状工具による条線文が矢羽根状構成に施された曾利V式土器、下位は縄文を施した加曾利E系土器である。覆土内出土の破片資料では、曾利IV式、V式土器、加曾利E系土器が主体である。石器では石皿の他、炉址の覆土上面から黒曜石原石2点が出土した。

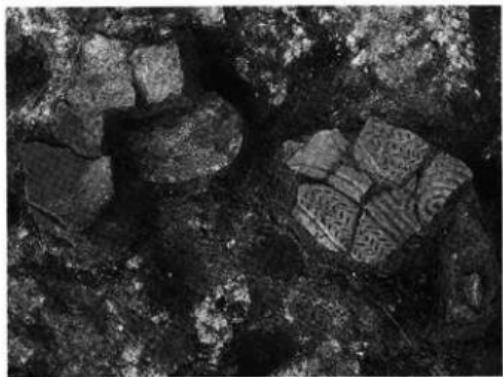
出土土器から曾利IV式期から曾利V式期にかけての住居址であると考えられる。



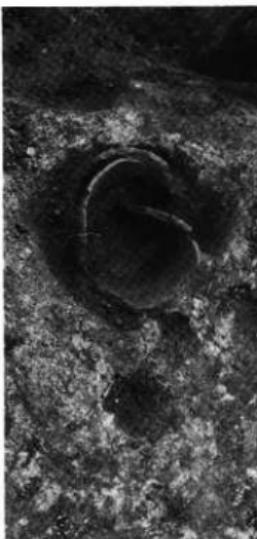
図版20 第18号住居址遺物分布（南から）



図版21 第18号住居址土器出土状況（南から）



図版23 第18号住居址土器出土状況（南から）



図版22 第18号住居址
埋甕（北から）

第19号住居址

台地平坦面と南斜面の境界に位置する。南壁が消失している。

平面形は隅丸五角形であると推定される（図版25）。主柱穴の平面形は橢円形で、大きな柱穴と小さな柱穴に分けられる。大きな柱穴は長径約50cmから40cm、短径40cmから30cmで、深さは70cmから40cmである。小さいものは長径約40cm、短径約30cmから10cmで、円形の柱穴の方がやや大きい傾向がある。両者を組合せれば主柱穴は7本となるが、大きな柱穴の配置は、第2号住居址にみられた3本主柱穴の配置に似ている。小さな柱穴は壁に寄っており、補助柱であると考えることも可能であると思われる。

炉址の壠方は方形であったと考えられるが、南側が土坑により破壊されていた。炉址の覆土には焼土が多量に含まれ、炉底は焼けていたが焼土は堆積していなかった。

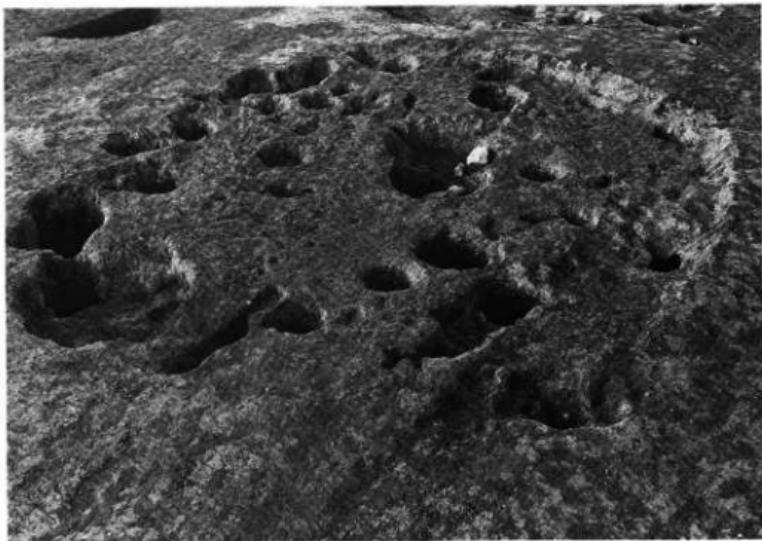
床面は硬く締っており、南側に傾いていた。住居址南壁下の床面から長楕円形のピットが1基検出された。住居址の主軸と炉址の位置関係、長楕円形のピットの位置から、出入口方向は南側であったと考えられる。

遺物の出土量は少ない。土器片が主体で、器形復元が可能なものはない。ほとんどが曾利IV式、V式土器で、低隆帯による口縁部区画を構成する土器、沈線による区画文の中に、櫛状工具による条線文、ヘラ状工具による沈線を「ハ」の字状構成に施している。口縁部には棒状工具による沈線で楕円区画を描いている。加曾利E系の土器が伴っており、地文の縄文の上から両脇にナデが加えられた隆帶を施すもの、隆帶による口縁部橢円区画内に縄文が施され、胴部は2本1組の沈線で分割された土器が含まれる。また胴部に沈線による渦巻文を施し、地文が無節純文である壺形土器がある。石器は打製石斧、凹石、磨石、ビエスエスキーユが出土した。

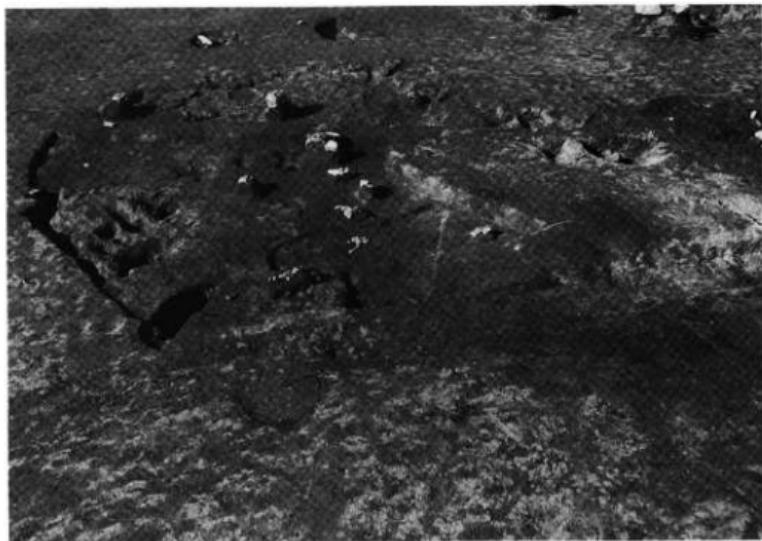
出土土器から曾利IV式期からV式期の住居址であると考えられる。



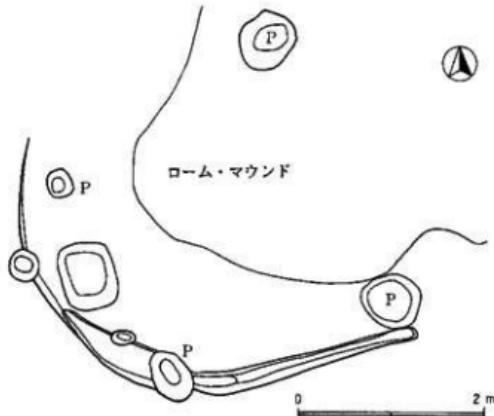
図版24 第19号住居址
炉址(南から)



図版25 第19号住居址（南から）



図版26 第21号住居址遺物出土状況（北東から）



第9図 第21号住居址概略平面図 (1/60)

第21号住居址

台地平坦面南側に位置する。遺存状態は良くない。住居址北半はロームマウンドにより破壊されていた。

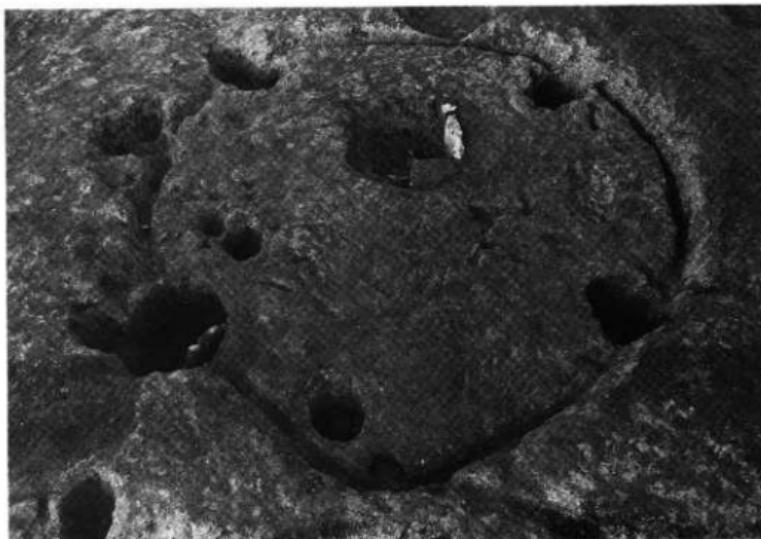
平面形は隅丸五角形であると推定される。主柱穴は4本ある。深さは48cmから43cmと比較的まとまりがあるが、平面形と径にばらつきがみられる。北東と南東の柱穴間の距離が、南西と北西の柱穴間の距離を上回り、全体に梯形の主柱穴配置であった。周溝との位置関係から推定すると、主柱穴は壁際で設けられていたと考えられる。炉址は検出されなかった。

床面は軟弱で、壠方の凹凸は激しい。周溝は東壁と西壁下から検出された。主軸線上から、方形のピットが検出された。稗田頭A遺跡の壠方では、土器より一回り大きい程度ものが多く、平面形状が方形の壠方を伴うものはないことから、出入口に關係する施設ではないかと想定している。平面方形のピット、主軸と炉址の位置関係から、出入口は南西方向に設けられていたと推定される。

出土遺物は少ない。土器はすべて破片資料で、器形復元できる土器はない。中期初頭の土器、曾利III式土器、称名寺式に比定されるを若干含むが、主体は曾利IV式土器である。低隆帯による区画に櫛状工具、半截竹管により条線文を施す土器と、ヘラ状工具による「ハ」の字状構成の沈線文を施す土器がある。「ハ」の字状構成の沈線文を施す土器には、区画を構成する隆起が加曾利E系土器の微隆起帶に似た断面三角形のものが1点であるが含まれている。地文が縄文である加曾利E系土器もほぼ同じ量出土している。

石器は横刃型石器、石錐、磨製石斧、凹石、礫器、敲石が出土した。

出土土器から曾利IV式期の住居址であると考えられる。



図版27 第22号住居址（南から）

第22号住居址

台地平坦面と南斜面の境界に位置する。遺存状態は良好である。

平面形は長軸方向に張り出す隅丸五角形である。主柱穴は4本で、壁際に設けられていた。柱穴の平面形は楕円形に近く、径50cmから60cm、深さは約70cmから43cmである。南西の主柱穴は土坑により壊されたと考えられる。

炉址は主軸線上の北に寄った位置から検出された。炉の壠方は方形で、炉石は壠方の東側と南側に残されているほかは抜き取られていた。壠方南側に残されていた炉石と同じ大きさで、肉眼でみると石質も類似する礫が、炉址南側の床面直上から出土した。炉の壠方にはば合うことから、抜き取られた炉石であると推定される。炉址の壠方と残存する炉石から、炉石を壠方の縁に平に並べて配置した炉であったと思われる。炉底には土器が敷かれていた。復元すると約1/2個体程になる量である。土器の表面はかなり荒れていた。炉址覆土には多量の焼土ブロックが含まれており、炉底は焼けていたが焼土の堆積はみられなかった。

床面は硬く締っており、炉の北側がやや高まる。周溝は全周し、深くしっかりしていた。主軸線南側の壁は大きく張り出しているが、その壁下には埋甕とピットが1基検出された。埋甕に用いられた深鉢は、正位に埋設されていた。埋甕とピットの位置、住居の主軸と炉の位置から出入口は南側であったと推定される。

遺物は多量に出土した。礫、石器、土器を含め10cmから30cm上位からまとめて出土した。器

形が分かれる土器は2個体出土した。いずれも両耳壺である。大小があり、大きな両耳壺は地文にヘラ状工具による「ハ」の字状文が施され、小さい両耳壺は地文に櫛状工具による横位の条線文が施されている。いずれも沈線による区画と溝巻文が施されている。他にx字状把手付の深鉢と鉢形土器が出土している。深鉢は胴部に主文様がある土器で、櫛状工具による条線文の上に、両脇にナデが加えられた低隆帶により溝巻文が施されている。鉢形土器は頸部が無文帯となり、低隆帶による溝巻文と接続する区画内にヘラ状工具による綾衫構成の沈線が施される。土器の諸特徴から曾利IV式土器であると考えられる。覆土出土の破片資料では、地文が櫛状工具による条線文で、沈線や両脇にナデが加えられた低隆帶により区画が構成される土器、低隆帶あるいは沈線による区画内にヘラ状工具による「ハ」の字状に沈線が施される土器、加曾利E系土器が主体をなす。この3類型の土器は、ほぼ同じ量が出土している。唐草文系土器は少量出土したのみであるが、この土器は唐草文系土器に影響を受けたと考えられている。胴部に低隆帶で溝巻文が描かれた土器が少量出土している。特徴のある遺物としてはわずか1片ながら、赤く塗られた土器片が出土している。床面に伴う遺物には埋甕がある。埋甕は底部をかいている他は大部分が遺存していた。半截竹管による地文の上に、両脇にナデが加えられた低隆帶が「Y」字形構成に垂下する曾利IV式土器である。

石器は打製石斧、石鎌、石鎌ブランク、石錐、磨製石斧、削器、凹石、磨石、輕石製品、ビエスキューが出土した。石錐は少なくとも5点出土し、今回調査した住居址の中では最も多い出土数である。

山七土器から曾利IV式期の住居址であると考えられる。

第23号住居址

台地平坦面上に位置する。遺存状態は良好である。

平面形は短軸方向に張り出す隅丸五角形である。主柱穴は4本であるが、南東の駒下中央に検出された柱穴は、他の柱穴より40cmほど深く壁に寄っている。住居址内での配設からみると主柱穴配置は、むしろ第2号住居址のような3本主柱穴であったと考えた方が良いと思われる。

炉址は、3本主柱穴であると考えた場合の主軸線上で、やや北に寄った位置にある。炉址の場所は方形で、南東の一辺に段がついていた。この段状の場所が炉石の抜き取り痕であるか、炉の焚き口の様な施設の痕跡であるかは判断できなかった。炉址内覆土上面からは、磨製石斧の欠損品が出土している。炉底からは拳大の角礫が出土した。炉底は焼けていたが、焼土は堆積していなかった。

床面は硬く締っており、平坦であった。周溝は全周している。南東側の壁下中央の柱穴の脇から、礫1点が出土した。礫の下からは、遺構は検出されなかった。主柱穴配置と炉址の位置から、出入口は南東方向であったと推定される。

遺物の出土量は極めて少ない。器形復元できる土器は1個体である。口縁部を欠損しているが、

頸部に棒状工具による波状沈線を2条巡らし、下段の波状沈線に連結する縦位の波状沈線を垂下させている。破片資料は中期初頭の土器と、曾利III式、IV式土器、加曾利E系土器、後期前半の土器が少量出土したのみで、主体となる土器型式は不明である。炉址の覆土からもわずかに土器片が出土したが、後期前半に属する土器以外は所属時期が不明である。

石器では打製石斧が出土した。

住居址の構造と器形復元できた土器から、曾利IV式期から曾利V式期の住居址であると考えておきたい。



図版28 第23号住居址（東から）



図版29 第23号住居址
遺物出土状況
(南西から)

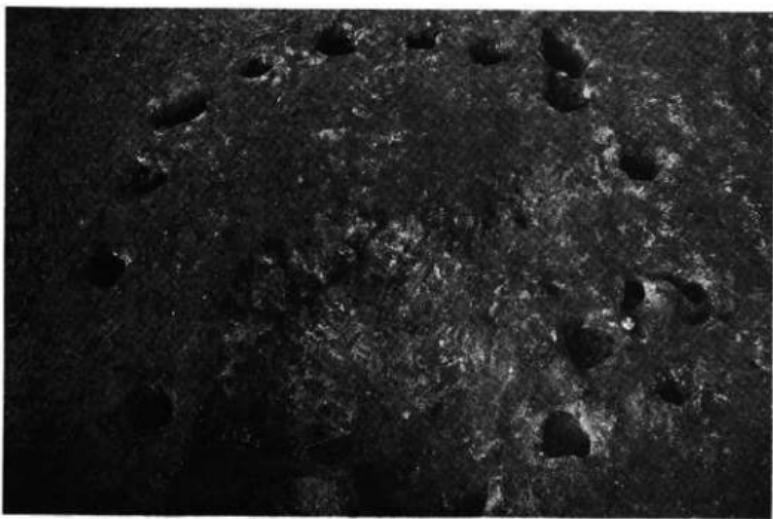
第24号住居址

南斜面下位に位置する。遺存状態は極めて悪く、確認されたのは柱穴のみであった。ロームマウンドが存在したことから柱穴の一部が確認できなかった。ロームマウンドとの新旧関係は不明である。

主柱穴配置は、約70cm間隔で円形に配列されるが、東側の柱穴間にはやや開く部分がある。柱穴の深さをみると、斜面上方から下方にかけてほぼ一定している。斜面に構築された住居址の主柱穴は、斜面に対しほぼ水平に造られた床面から一定した深さをもっていたことを考えると、柱穴の深さの設定の仕方が異なっているように思われる。

出土遺物は少なく、土器破片2片が得られたのみである。1片は柱穴内から出土したが、小破片のため土器型式は不明であり、他の1片はロームマウンド出土の土器片である。ロームマウンド出土の土器片は縄文を地文とし、断面三角形の隆帯を区画文とした土器である。隆帯の特徴が、加曾利E式土器最終末の土器の微隆起帯に類似する。

ロームマウンドがこの遺構より新しいとすれば中期最終末の遺構である可能性も残されているが、所属時期は不明とするほかない。



図版30 第24号住居址（南から）

第25号住居址

南斜面下位で傾斜がいったん緩くなる部分に位置する。遺存状態は悪い。

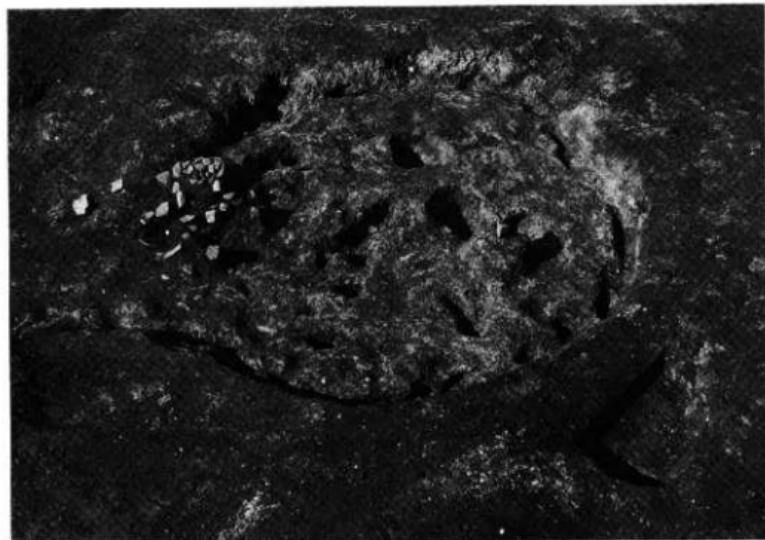
平面形は隅丸方形か隅丸五角形であると推定される。住居址としては規模が小さく、主柱穴は1本で住居址中央に設けられていた。炉址は検出されていない。

床面は住居址北半にのみ認められ、硬いが締った部分はみられなかった。周溝は、西から北、東側の壁下で痕跡的に認められたのみである。この土器が床面とほぼ同じ高さから出土したことから、住居址南半の床面は黒色土中に設けられていたと考えられるが、調査中に確認することができなかった。

住居址の規模や主柱穴配置、炉址が認められないことから、一般の住居址であるとは考えにくい。

住居址南西壁際の黒色土から、土器が固まって出土した。備状工具による地文の上に、低隆帯により区画を構成する土器である。数個体分の破片資料があるが、器形復元できる土器はない。土器の特徴から、曾利IV式土器であると考えられる。

出土土器から曾利IV式期の住居址であると考えられる。



図版31 第25号住居址（東から）

第26号住居址

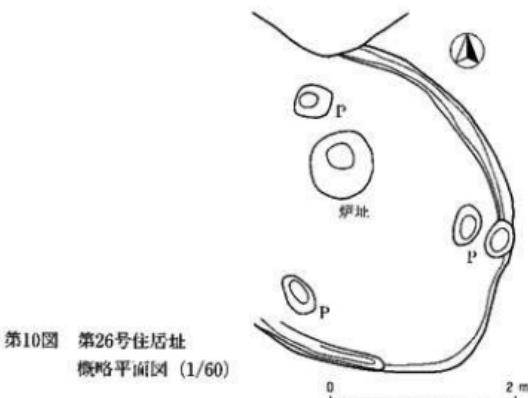
台地平坦面に位置する。遺存状態は悪い。確認面より上位に壁が設けられたものと考えられ、壁は検出できなかった。

平面形は隅丸方形か隅丸五角形であると推定される。主柱穴は3本で、南北の主柱穴が2本検出されており、建て替えられたものと考えられる。

炉址は住居址主軸線上やや北に寄りに位置し、炉石はすべて抜取られていた。炉底は焼けていたが、焼土の堆積はみられなかった。

床面は軟弱で凹凸が激しい。周溝はほぼ全属するが、住居址北西部では検出されていない。

遺物の出土はなく、所属時期は不明である。



第10図 第26号住居址
概略平面図 (1/60)

第27号住居址

台地南斜面中ほどに位置する。遺存状態は悪く、住居址北半約1/4が遺存していた。

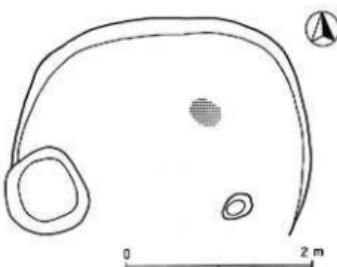
平面形は不明であるが、遺存部分から隅丸方形に近いと思われる。主柱穴は1基検出できたが、配列など詳細は不明である。

炉址は住居址北側に位置する。土器の口縁部から頸部を用いた土器埋設炉である。土器の周辺に焼土が堆積していた。床面は硬く締っており、周溝は検出されなかった。

遺物の出土量は少ない。覆土中から出土した土器は、中期初頭の土器、C字爪形文が施された半隆起線が口縁部に施された土器が出土している。炉址から出土した埋設土器は、角押文により文様が構成された猪沢式土器で、口縁部からは太い刻みが施された隆帯が垂下する。口縁部から胴部にかけては、角押文によって区画が構成されており、隆帯による区画はみられないことから、猪沢式でも古い段階の土器であると考えられる（茅野市教育委員会 1990）。

石器は打製石斧、ビエスエスキューが出土した。

炉の埋設土器、覆土出土の土器から、猪沢式期の住居址であると思われる。



第11図 第27号住居址概略平面図 (1/60)

第28号住居址

台地平坦面のうち、台地先端に近い部分の北側に位置する。遺存状態は良好である。

平面形は隅丸五角形で、主柱穴は3本である。主柱穴の平面形は円形で、やや太目の柱穴である。いずれの主柱穴も壠方の一面が住居址内側に向って傾いているが、特に南側の2本の主柱穴壠方の傾きは大きい。

炉は主軸線から北にずれた位置から検出された。炉の壠方は方形で、壠方の2辺にあたる部分に炉石が残されていた。炉石はいずれも一枚石で、壠方にそって立てられていた。炉址覆土上面の床面と同じ高さから、土器1個体と凹石が出土した。出土位置から炉石抜き取り後に、廃棄されたものと考えられる。炉底は焼けていたが、焼土の堆積はみられなかった。

床面は硬く締っており、周溝は全周し深くしっかりしている。住居址東側の床面から埋甕1基を検出した。埋甕は正位に埋設されていた。住居址の主柱穴配置と炉址の位置関係からは出入口は南側であると考えられるが、埋甕の位置が出入口方向を示すとすれば東側となる。南側の床面からは埋甕の壠方に似たピットが検出され、南側の周溝は浅いピット伴っているが、埋甕は遺存していないことから、南側の出入口が東側に移動され、埋甕が設けられたと考えておきたい。

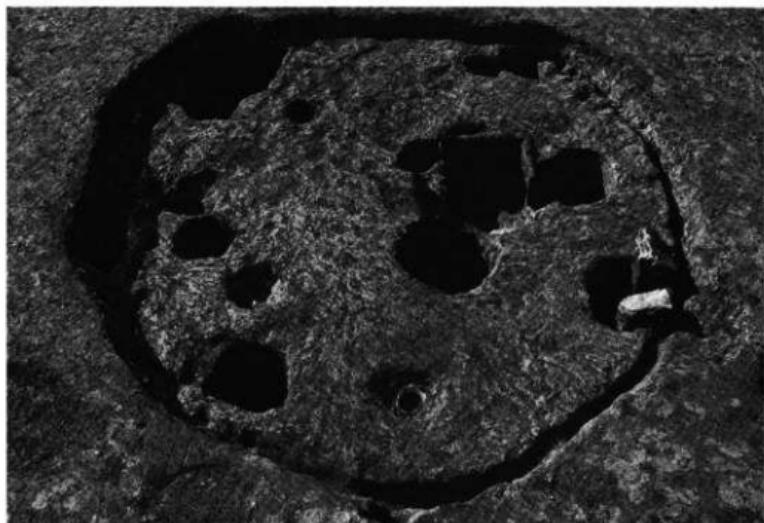
住居址覆土調査中に、覆土内から重複した上坑2基が検出された。東側の1基は比較的浅かったとみられ床面には痕跡を残していなかったが、西側の1基は深く炉址の一部を破壊していた。この土坑は覆土中にロームブロックを多量に含み、柱痕が観察された。土坑覆土が住居址覆土上面から確認されたことから、土坑の構築時期の方が新しいと考えられる。

遺物は、住居址中央床面上から集中して検出された。図版にみると、出土状況は復元が可能であることを思わせるものであったが、完全に復元できた土器はない。器形をうかがい知るこ

とができるまでに復元できた土器が、6個体出土した。半截竹管や櫛状工具による地文の上に、両脇にナデを伴う低隆帯により胴部が区画されている深鉢が主体となる。口縁部に文様帶を構成する土器と、口縁部が無文となるものの2者がある。地文が櫛状工具による縦位の条線文である深鉢に隆帯による口縁部文様帶が施される、加曾利E式土器の特徴を持つ土器がある。他に縄文を地文とする加曾利E系の深鉢が1個体出土しているが、器形は曾利系土器に類似している。破片資料においても条線文を地文とし低隆帯が施文される土器が大部分で、条線文を地文とするが区画が沈線によって構成される上器や、縄文を地文としたもの、ヘラ状工具による沈線を地文とした土器はわずかである。破片資料の大部分は深鉢であると思われるが、x字状把手の他、鉢の破片と考えられる土器片が少量含まれている。床面にともなう遺物には埋甕がある。口縁部を欠き、頸部以下底部まで遺存していた。曾利IV式土器である。

打製石斧、石鎌、石鋤ブランク、石錐、石匙、削器、凹石、磨石、ピエスエスキーユ、軽石製品が出土した。

出土土器から、曾利IV式期の住居址であると考えられる。



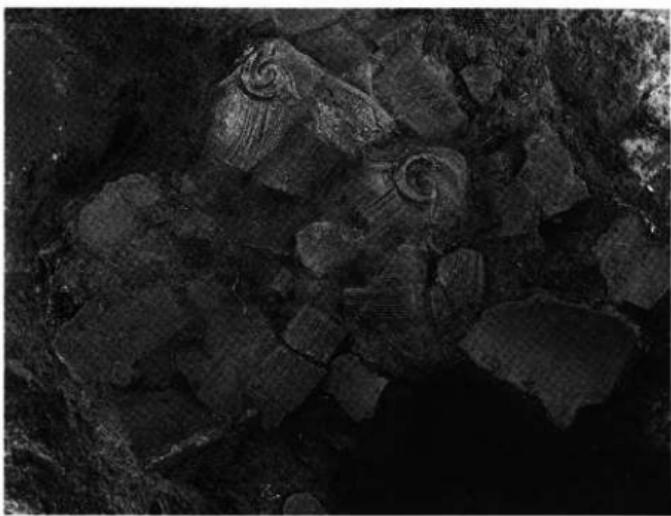
図版32 第28号住居址（東から）



図版33 第28号住居址遺物分布（南から）



図版34 第28号住居址炉址断面と土器出土状況（南から）



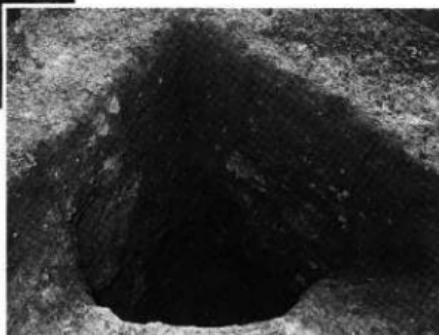
图版35
第28号住居址
土器出土状况



图版36
第28号住居址
土器出土状况



図版37 第28号住居址内
土坑検出状況



図版38 第28号住居址内
土坑土層断面

第29号住居址

台地平坦面先端部近く北側に位置する。遺存状態は良好である。

平面形は隅丸五角形で、長軸方向に張り出している。主柱穴は4本で、壁に寄った位置に設けられている。柱穴は円形で、径は小さい。南東と北西の主柱穴は建て替えた痕跡がみられた。

炉址は主軸線上で、北に寄った位置にある。炉の堀方は方形で、炉石はほとんどが抜き取られている。炉石の抜き取り痕から、炉石を堀方にそって平に並べた炉であったと推定される。炉底から礫がまとまって出土した。礫の形状から炉石として用いられていたものであると推察される。炉の堀方南東隅の部分から出土した土器は、あたかも炉石とともに組まれたかの様な出土状況を示しているが、炉の使用時から存在したものかどうかは不明である。炉底は焼けていたが、焼土の堆積はみられなかった。炉址南西の床面からは焼土が検出された。

床面は硬く締っており、炉の北側が他の部分に比べやや高くなっていた。周溝は全周するが、炉址の北側を除き幅が広く、堀方がはっきりしない。住居址両側の突出した部分の床面から埋甕1基が検出された。埋甕は正位に埋設されていた。住居址の主軸と炉址の位置関係、埋甕の検出位置から、出入口は南側であったと考えられる。

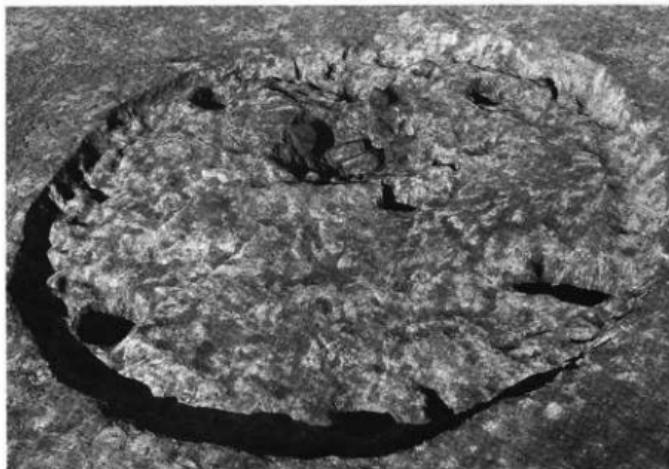
遺物は、炉址の周囲の床面上約1cmから16cmの範囲から出土し、住居址覆土の層位では第1層である暗褐色土層に含まれていた。いずれも一部を欠くが、器形を復元し得る土器が、6個体出土している。深鉢3個体は、櫛状工具による地文の上に低隆帯や沈線で区画を構成した土器である。

いずれも曾利IV式土器の特徴を具えている。この他^々字状把手付の大形の深鉢と壺形土器が出土している。大形深鉢は、半截竹管による縦位の条線文の上に、低隆帯による渦巻文が施された曾利IV式土器である。壺形土器は胴部の一部に低隆帯による渦巻文が施されている。

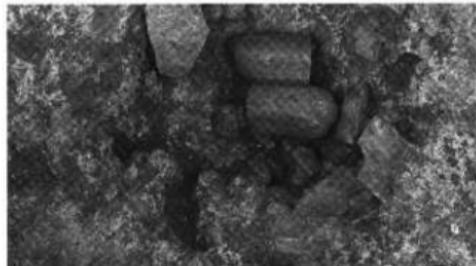
床面にともなう遺物には埋甕と炉の縁から出土した深鉢がある。埋甕は底部と口縁部を欠いているため、文様構成を完全に把握できたわけではないが、胴部に波状沈線を施し、「7」区画文ではなく、条線文を地文としていることから、曾利IV式土器であると考えられる。炉の縁から出土した土器は、隆帯で区画された幅狭な口縁部に棒状工具による沈線で崩れた橢円区画を描き、胴部には棒状工具による沈線で区画を構成し斜行する沈線を施している。曾利IV式でも古い段階の土器であると考えられる。

石器は打製石斧、横刃型石器、石鎌、凹石、磨石、軽石製品が出土した。

出土土器から、曾利IV式期の住居址であると考えられる。



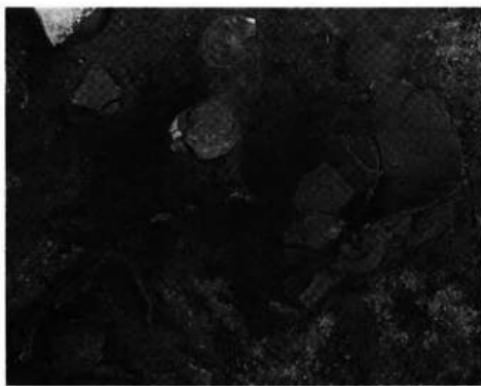
図版39 第29号住居址（南から）



図版40
第29号住居址
炉址完掘状況（手前が南）



図版41 第29号住居址中央 土器出土状況（南から）



図版42
第29号住居址
炉址周辺土器出土状況（南から）



図版43
第29号住居址中央
土器出土状況（南から）

第30号住居址

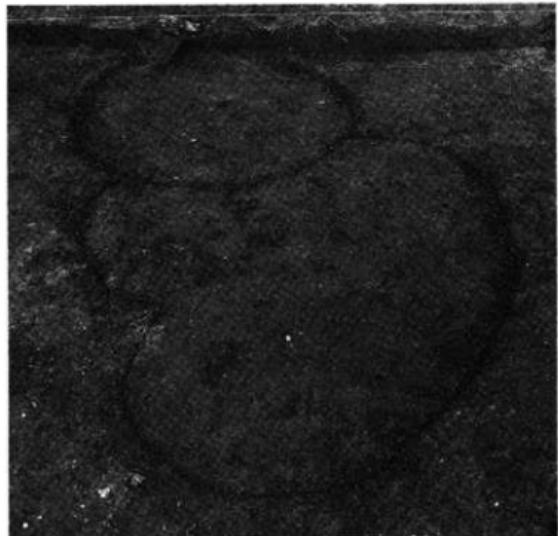
台地平坦面北側に位置する。遺存状態は良好であるが、北側壁面を表土剥ぎ作業中に破壊してしまった。

住居址覆土から、重複した土坑が検出されたが、床面に達するものはなかった。北側の土坑からは鉢付有孔土器の口縁部が出土している。覆土内から検出されたことにより、土坑の方が新しい遺構であると考えられる（図版44）。

平面形は隅丸五角形で、6本配置の主柱穴が2組あり、一方の柱穴には貼床がなされていた。ほぼ同位置での建て替えがあったとみられる。各主柱穴の平面形は円形で、堀方全体が比較的大きい。壁に寄った位置に設けられている（図版45）。

炉は1基検出された。住居の主軸線上の、やや北に寄った位置にある。堀方は方形で、縁に段がついていた。炉石はすべて抜き取られていたが、抜き取り痕からみて炉の縁に礫を平に並べた炉であったと考えられる。炉址内覆土より曾利IV式土器片が出土している。炉底は焼けていたが、焼土の堆積はみられなかった。

床面は硬く締っていたが、炉の北側から東側にかけて貼床によりやや高くなっている部分がみられた。東側での床面との差は、約7cmである。床面上には礫が配列されていた。住居址北側にはみられなかったが、床面壁際の部分に2個1組になって等間隔に配列されていた。一部を除いて多くは偏平な礫である。住居址南東隅の礫のうちの1個は、柱穴内に落ち込んだかのような出土



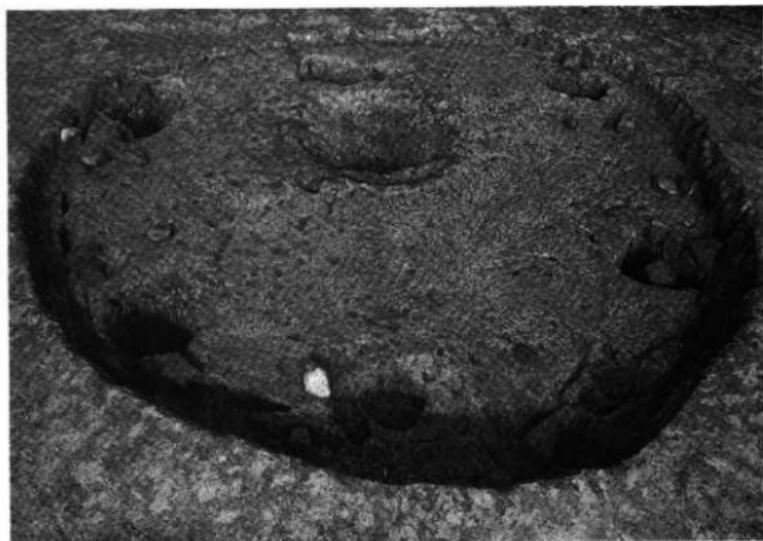
図版44
第30号住居址
覆土内土坑検出状況
(南から)

状況を示していた。周溝は、住居址西壁下から南壁下にかけて二重に巡っていた。床面精査の時点で周溝が確認されたが、当初周溝の幅は、5cm前後であったが周溝堀方底部において黒色土が内側に回り込んでいる部分がみられた。この部分を拡張すると、ロームブロックが周溝覆土の一部となるており、周溝堀方の幅は約15cm前後となった。ロームブロックの部分は床面より締りはないが、自然堆積の覆土とするには、締っているように思われた。住居址南側の床面には、黒色土とロームブロックの混合土を覆土とした浅い掘り込みが、広い範囲にみられた。掘り込み内から、長軸が住居址内側から外側に向う長楕円形を呈する浅いピットが検出された。この掘り込みの西側床面下から、正位に埋設された埋甕が検出された。上面には黒色土とロームブロックの混合土による貼床がなされ、一部が主柱穴により破壊されていた。長楕円形ピットの東側からも、不整円形の浅いピットが検出されている。

住居址の主軸方向と炉の位置関係、住居址南側の浅い掘り込みと埋甕の位置から、出入口は南をむいていたと考えられる。

遺物の出土量は多い（図版46）。土器は住居址の北西に偏った位置から集中して出土した。

多くの遺物は住居址覆土第1層暗褐色土から第2層暗黄褐色土上部にかけて出土したが、北壁近くから出土した土器は床面上から約13cm上位までの範囲内から出土している。覆土上部から出土した土器には、完形の土器、器形復元可能な土器が含まれるが、全体に破片となって入交じっている土器と、大破片がまとめて出土したものとに分けられる。覆土出土の土器のうち、住居



図版45 第30号住居址（南から）

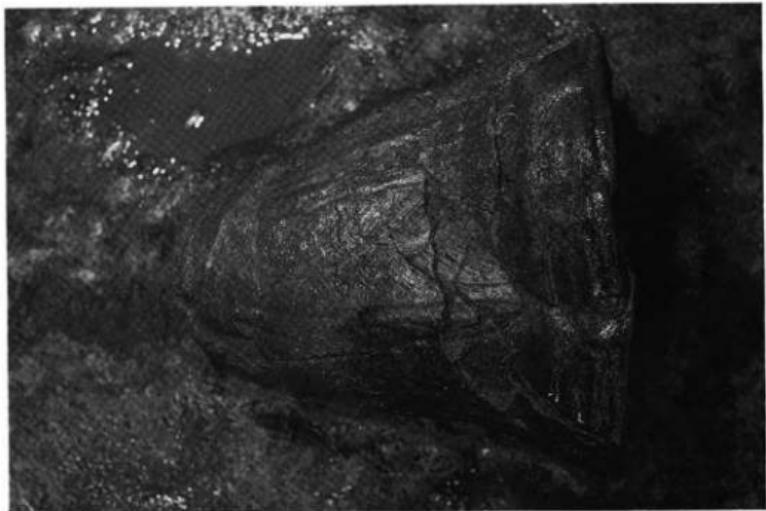


図版46 第30号住居址遺物分布（南から）

址南半からは完形土器が横位で（図版47）、住居址東半からは底部が穿孔された完形土器が逆位で出土した（図版48、49）。図版47は口縁部に隆帯による楕円区画を施し、胴部に沈線による区画文と波状沈線文を施した曾利IV式土器である。図版48は口縁部に1条の沈線を施し、胴部を分割する隆帶上に沈線により蕨手状文を施している。胴部区画文内は先割れ工具により綾杉状文を施す土器である。文様構成などから曾利IV式土器であると思われる。図版48の近くから曾利III式土器の特徴をもつ土器が出土している。胴部が張る器形を有し、口縁部は沈線内に円形刺突を施す蕨手状文により区画されている。胴部は渦巻状隆帯により区画され、縦位の沈線が充填されている。胴部区画文内には縦位の交互刺突文が施され、連弧状の沈線が胴部下位に施されている。崩れた形で出土した土器（図版50）の中には、曾利III式土器、曾利IV式土器が含まれている。

図版51、53は住居址北壁に近い床面直上から出土した土器である。図版51は口縁部の一部と底部を欠くが、ほぼ完形の曾利III式土器である（図版52）。図版53は口縁部破片であり、周溝上面から出土した。床面にともなう土器には埋甕がある（図版54）。胴部が張る器形で、口縁部に隆帯による楕円区画を4単位施し、渦巻状隆帯を中央に配し縦位沈線を充填する。楕円区画文の下に交互刺突文が施されている。胴部は変形腕骨文により分割され、劍先渦巻状構成をとる隆帯が連結する。文様構成から曾利II式土器であると思われる。

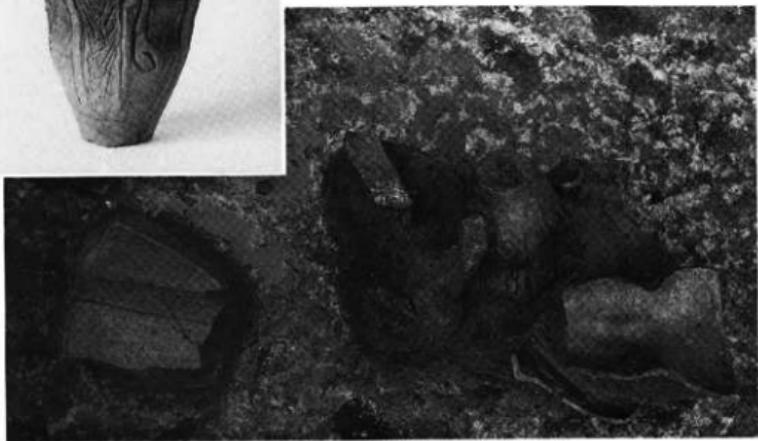
石器は打製石斧、横刃型石器、石鎌、石錐、磨製石斧、凹石、磨石、敲石、ピエスエスキーユ、軽石製品が出土している。敲石は主柱穴内から出土した。



図版47 第30号住居址南半土器出土状況（南から）



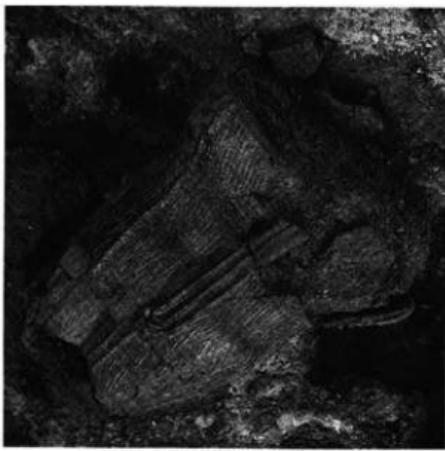
図版48 第30号住居址伏甕



図版49 第30号住居址 伏甕他出土状況（南から）



図版50 第30号住居址北半部遺物出土状況（南から）



図版51 第30号住居址北壁
土器出土状況1（南から）



図版52 第30号住居址北壁出土土器1



図版53 第30号住居址北壁
土器出土状況2（南から）



図版54 第30号住居址出土埋甕

第30号住居址は2組の主柱穴をもち、周溝も東壁から南壁にかけて2条認められることから、住居面積をさほど変更しない建て替えが行なわれたものと思われる。埋甕の上部に貼床が認められたことも、住居址の建て替えにともなう行為であると考えられる。埋甕が出土土器のうち古い時期に属することを考えれば、最初に建てられた住居址は、南側の主柱穴を除く5本主柱穴で、埋甕の位置が入口であったと推定される。埋甕の土器型式から、少なくとも曾利II式期には住居の構築が行なわれたと考えられる。住居の建て替え時には、主柱穴が1本追加され、6本主柱穴となつた。この柱穴を掘り込む際に、埋甕の1部が破壊されたと思われる。6本主柱穴への変更にともない、住居範囲が僅かに拡大された。出入口の位置も変更され、やや東に寄った位置に出入口施設が設けられたと思われる。この際埋甕は設けられなかったことから、建て替えの時期、住居廃絶の時期は調査結果からは断定しにくい。また住居址使用期間中に断絶があったかどうかも不明であるが、床面上から曾利III式土器が出土していること、覆土中の土器にも曾利III式土器が含まれていることから、住居が継続して使用されていた可能性は否定できないと考える。この住居が廃絶された時期は、覆土中の出土土器からみて曾利III式土器から曾利IV式土器への移行期であったと考えられる。

第31号住居址

台地平坦面北側に位置する。遺存状態は比較的良好であるが、西壁の一部が耕作により破壊されていた。

平面形は隅九六角形である。主柱穴は3本で、平面形は円形である。北と南西の主柱穴堀方の内側がやや内傾している。

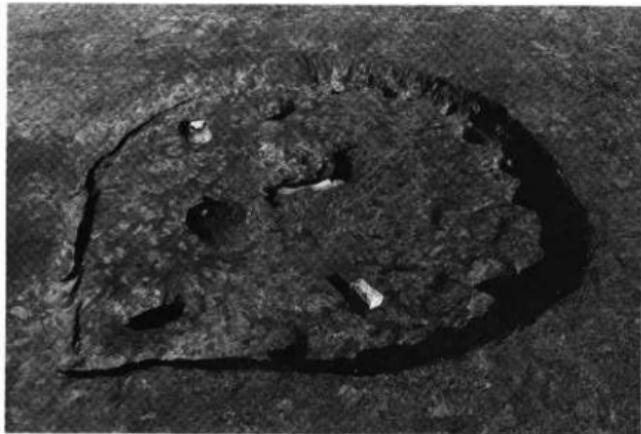
炉址は主軸線上やや北寄りにある。炉の堀方は方形で、炉石は抜き取られていた。炉の縁の部分の堀方が段状であることから、炉の縁に炉石を平に配していたと推定される。

床面は硬く締っていた。周溝は全周するが、東壁付近でやや不明瞭であった。南側の床面から埋甕1基が検出され、その東側の周溝際から浅いピットが検出された。埋甕は正位に埋設されていた。住居址主軸と炉の位置関係、埋甕と南壁下のピットの存在から住居出入口は、南側にあったと考えられる。

遺物の出土は、全体に少ない。覆土中からは土器片が主体となって出土した。曾利IV式土器が主体である。床面に伴う遺物としては、伏甕1基と埋甕がある。伏甕は炉址北西から出土し、下部に深さ約10cmの円形の掘り込みがある。伏甕は曾利IV式土器で、口縁部に1条の沈線をひき、胴部を沈線による「匚」区画文で分割している。区画文内には櫛状工具による状線文を施している。伏甕の上部には蓋をするかのように、別個体の曾利IV式土器の口縁部がのせられた状態で出土した。埋甕は胴部を埋設したもので、下部の断面の角を磨り取ったかのような部分がある。胴部には脇にナデが加えられた低隆帯がY字状に垂下し、胴部を区画している。区画内には櫛状工具による矢羽根状構成の条線が施されている。曾利IV式土器である。

石器では打製石斧、石匙が出土した。

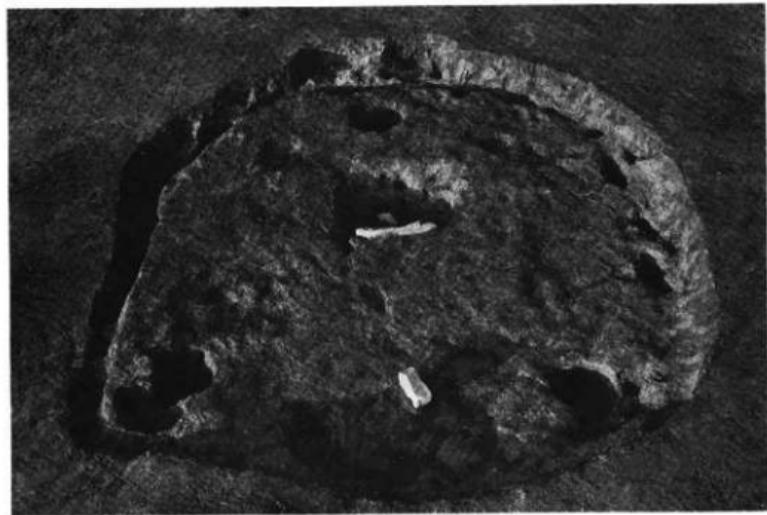
出土土器から曾利IV式期の住居址であると考えられる。



図版55
第32号住居址
遺物分布
(南から)



図版56 第31号住居址伏甕検出状況



図版57 第31号住居址（南から）

第32号住居址

台地平坦面北側に位置する。遺存状態は比較的良好である。

平面形は隅丸五角形である。主柱穴は3本であるが、東側の主柱穴の東側に柱穴が1基検出され、柱の建て替えが推定される。主柱穴の平面形は円形である。すべての主柱穴堀方の内側が内傾している。

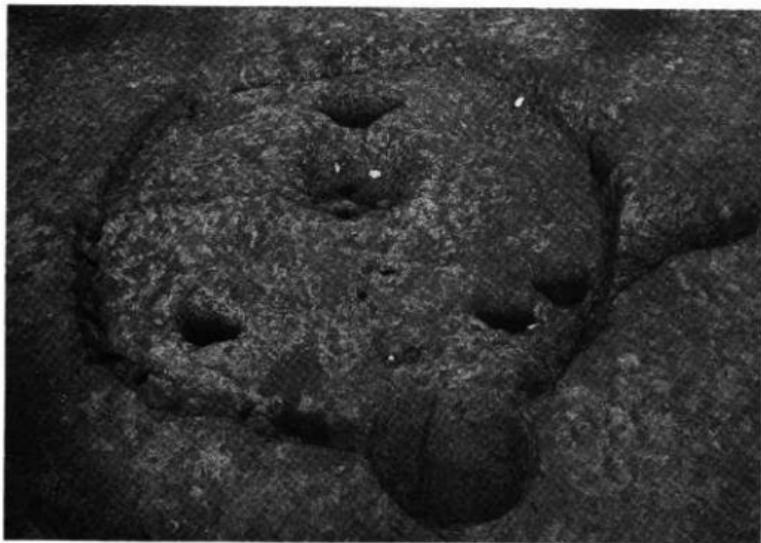
炉址は主軸線上やや北寄りの位置にある。炉の堀方は方形で、炉石はすべて抜き取られている。

床面は硬く締っている。周溝は全周し、深くしっかりしている。南壁下の周溝内にビットが検出された。住居址主軸と炉の位置関係、周溝内ビットの位置から、出入口方向は南であったと考えられる。

遺物の出土量は少ない。器形がわかる土器はなく、すべて破片となって出土した。出土土器片には、中期初頭梨久保式土器と曾利III式土器があり、主体となるのは曾利III式土器である。

石器は打製石斧、凹石、ピエスエスキューが出土した。

出土土器から、曾利III式期の住居址であると考えられる。



図版58 第32号住居址（南から）

第33号住居址

台地平坦面北側に位置する。遺存状態は悪い。壁は確認できず住居址範囲は周溝により確認できた。

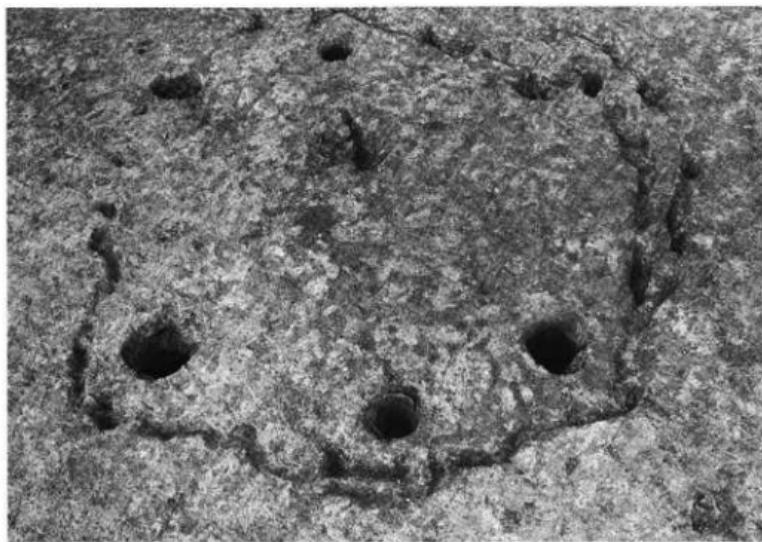
平面形は不明である。主柱穴は3本で、平面形は円形である。周溝との位置関係により、柱穴は壁際に寄っていたと考えられる。南東と南西の主柱穴埋方の住居址外側は外傾しているが、北の主柱穴埋方は内傾している。

炉址は、主軸線上北寄りに位置する。炉の埋方は小さく、炉石は抜き取られていた。焼土が約10cmの厚さで堆積しており、炉底は焼けていた。

住居址南側に、埋甕が検出された。埋甕は正位に埋設されていた。住居址主軸と炉址の位置関係、埋甕の検出位置から出入口は南側であったと考えられる。

住居址の時期を特定できる遺物は、埋甕のみである。口縁部を欠いているため全体の文様構成はわからないが、胴部は脇がなでられた隆帯により区画されて矢羽根状構成をとる条線文が施されている。

埋甕の特徴から、曾利IV式期の住居址であろうと考えられる。



図版59 第33号住居址（南から）

第34号住居址

台地平坦部北側に位置する。遺存状態は良好である。

平面形は隅丸五角形である。主柱穴は4本で、壁際に寄っている。主柱穴の平面形は円形である。

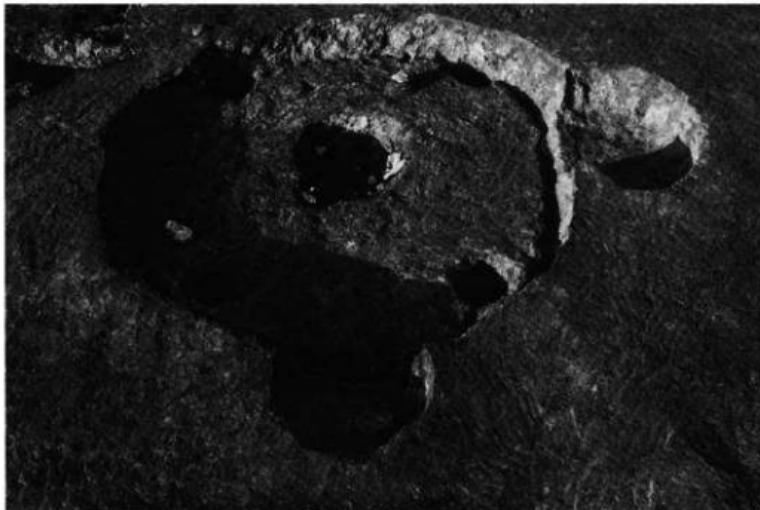
炉址は主軸線上やや北により位置する。炉の壠方は方形で、炉石は抜き取られている。炉底は焼けていたが、焼土は堆積しておらず、炉址覆土にも焼土はごく少量しか含まれていなかった。

床面は硬く締っている。周溝は全周し、深くしっかりしている。住居址南側の床面には浅いピットが2基検出された。住居址主軸と炉址の位置関係、南側の2基のピットの存在から、住居出入口方向は南であると考えられる。

遺物の出土量は少ない。復元できる土器はなく、器形が判明する土器も1個体があるのみである。曾利III式の深鉢で、南西の柱穴上面の覆土中から出土した。隆帶により口縁部区画が構成され、縦位の沈線が施されている。口縁部と胴部を限る隆带上に円形刺突文が施されている。胴部は2本1組の隆帶で区画され、棒状工具による綾杉構成の沈線が施されている。破片資料は微細なものが多く、中期初頭の土器、中期後半の土器がわずかに出土したのみである。

石器ではビエスエスキーユが出土した。

出土土器から曾利III式期の住居址である。



図版60 第34号住居址（南から）



図版61 第34号住居址出土土器（北から）



図版62 第34号住居址土層断面



図版63 第34号住居址出土炭化物

第35号住居址

台地平坦面北側に位置する。遺存状態は良好である。東側で土坑と重複し、土坑を切って住居が構築されている。

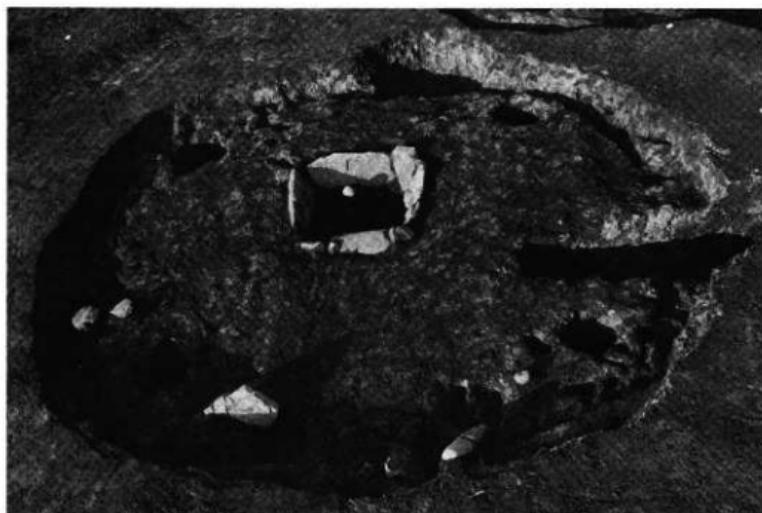
平面形は、隅丸五角形である。主柱穴は4本で、平面形は円形である。

炉址は方形で、炉石が遺存していた。炉石は堀方に沿って立てられたものであった。炉底のやや上位から、断面が円形の棒状礫が直立して出土した。炉底は焼けていたが、焼土の堆積はみられず、覆土には焼土ブロックが少量含まれていたのみであった。

床面は比較的軟弱であった。周溝はほぼ全周するが、北西の壁面下と南壁下で不明瞭になっていた。住居址南側の床面には、浅いピットが2基並んで検出された。2基のピット間の周溝は不明瞭である。西側床面上には礫2個が検出された。南壁西側の浅いピットの脇からは偏平な礫1個が検出され、東側のピットの脇からは棒状の礫が出土した。住居址の主軸と炉址の位置関係、住居址南側のピットの位置から、住居の出入口は南側であったと考えられる。

遺物の出土量は少ない。中期初頭、曾利II式、IV式、加曾利E系土器、後期前半の土器が出土している。出土量にさほど違いはないが、主体となる土器は曾利II式土器であると思われる。

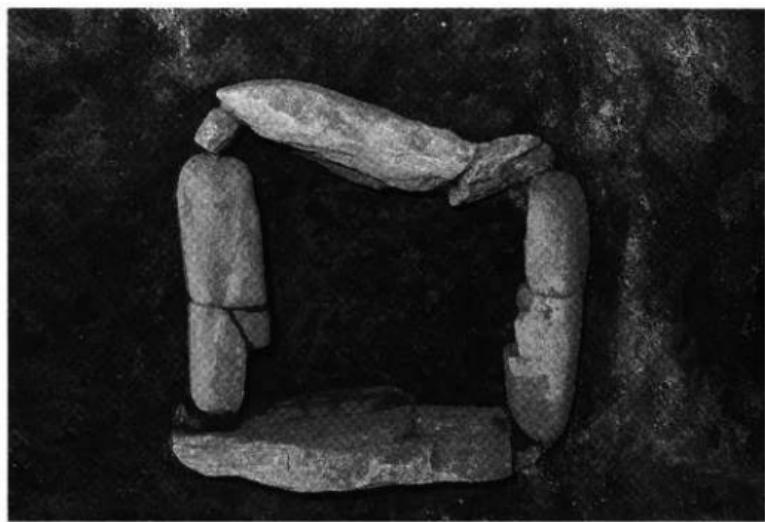
出土土器から曾利II式期であると考えられる。



図版64 第35号住居址（南から）



図版65 第35号住居址炉址（北から）



図版66 第36号住居址炉址（南から）

第36号住居址

台地平坦面が台地先端に向いやや傾斜する地点に位置する。遺存状態は悪い。平面形は隅丸五角形であったと推定される。主柱穴は4本で、壁際に寄っている。主柱穴堀方の内側壁面が内傾する。

炉址は住居址北側に寄っているが、住居址の主軸からやや西にずれた位置にある。炉石は遺存しており、方形に組まれていた。炉の南北は一枚石を立て、東西は棒状の礫を炉の堀方の縁に配置していた。炉石と炉底は焼けていたが、焼土は堆積していなかった。覆土内にも焼土ブロックが少量みられるのみである。

床面はやや軟弱であった。周溝は壁が残っていた部分ではほぼ全周していたが、東壁下で部分的に跡切れていた。南壁の張り出した部分に浅い埋甕1基が検出された。埋甕は逆位に埋設されていた。住居址主軸と炉址の位置関係、埋甕の位置から出入口は南側であったと考えられる。

遺物の出土量は少ない。曾利II式、III式、IV式土器、加曾利E系土器および後期前半の土器が出土している。床面に伴う遺物としては、埋甕がある。底部が欠いた深鉢が用いられている。口縁部に4単位の突起をもつ曾利IV式土器である。地文は櫛状工具による条線文で、突起下に沈線による渦巻文が施され、胴部は同一の工具による沈線で区画されている。

石器は打製石斧、石鎌、石鐵ブランクが出土した。

出土土器から曾利IV式期の住居址であると考えられる。



図版67 第36号住居址（南から）

第37号住居址

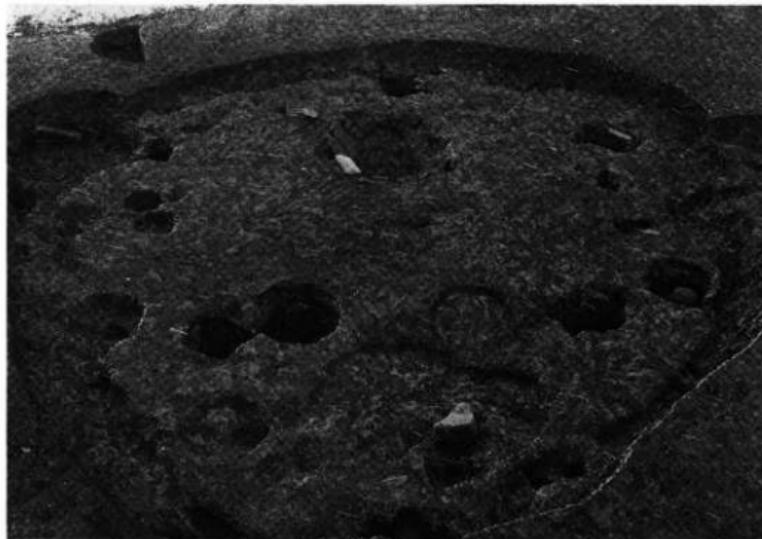
台地平坦面北東側に位置する。遺存状態は良好である。

平面形は隅丸五角形である。主柱穴は5本で、2組ある。南側の2本の主柱穴が西にずれた位置に建て替えられたものと思われる。北側の3本は壁際に寄っているが、南側の2本はやや住居址内側に設置されていた。他の隅丸五角形の住居址にくらべ、張り出した部分の面積が広い。この部分から浅いピット4基と不整形の掘り込みが検出された。ピットには貼床がみられなかつたが、不整形の掘り込みは貼床がなされていた。

炉址は、住居址主軸線上北寄りに位置している。炉の堀方はほぼ方形で、堀方西側に炉石の一部が残されていた。炉石は一枚石で堀方に沿って立てられていた。炉底は焼けていたが、焼土は堆積していなかった。

床面は硬く繊り、周溝は跡切れながらも全周していた。住居址南壁下では周溝が広がつておらず、内部に小ピットが検出された。東壁下でも周溝が広がっていたがピットは検出されていない。住居址主軸と炉の位置関係、周溝の在り方から、住居址の出入口は住居址南側であったと考えられるが、住居址東側も主柱穴配置の捉え方によっては出入口であったと考えられ、本住居址が建て替えられたものである可能性が残っている。

遺物は炉の南側の床面上約7cmから24cmの範囲から集中して出土した。出土層位は住居址覆上第1層である。復元できる土器は1個体ある。x字把手付の大形の深鉢で、把手は6単位ある。胴

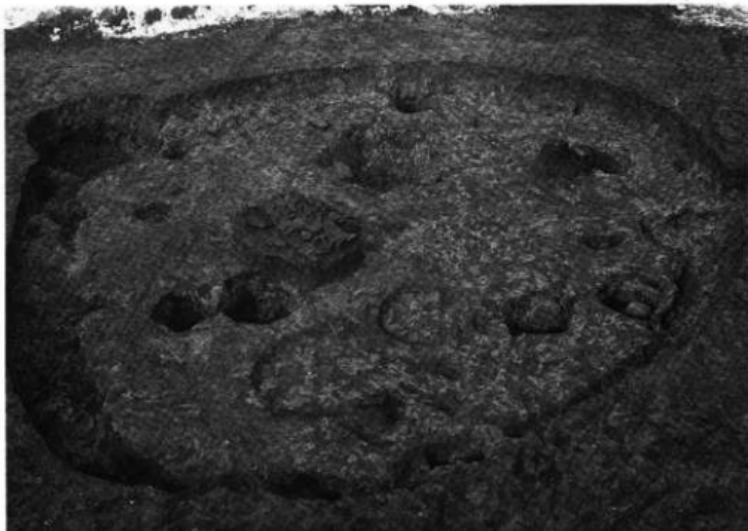


図版68 第37号住居址（南から）

部には半裁竹管により3本に分割された低隆帯で渦巻文が構成されている。地文はヘラ状工具による短い沈線が施されている。他は破片資料で曾利II式、III式土器が主体をなす。柱穴の底面からは丸石が出土した。柱穴の大部分を占める大きさである。

石器は少なく、石錐、ピエスエスキーユが出土した。

出土土器から曾利II式期の住居址であると考えられる。



図版69 第37号住居址遺物分布（南から）



図版70
第37号住居址中央
土器出土状況
(南から)



図版71 第37号住居址柱穴内丸石出土状況（南から）



図版72 第37号住居址炉址（東から）

第38号住居址

台地平坦面北側に位置する。遺存状態は良好である。東側には焼土を作った土坑が検出された。この土坑の焼土が住居址の周溝を埋めていることから、土坑のほうが新しい時期の遺構であると考えられる。

住居址の平面形は隅丸五角形である。主柱穴は4本で、壁際寄っている。主柱穴の壠方は大きい。住居址の南壁際に、径は主柱穴に比べやや小さくなるが、深さにおいて主柱穴に勝るピットが検出されている。

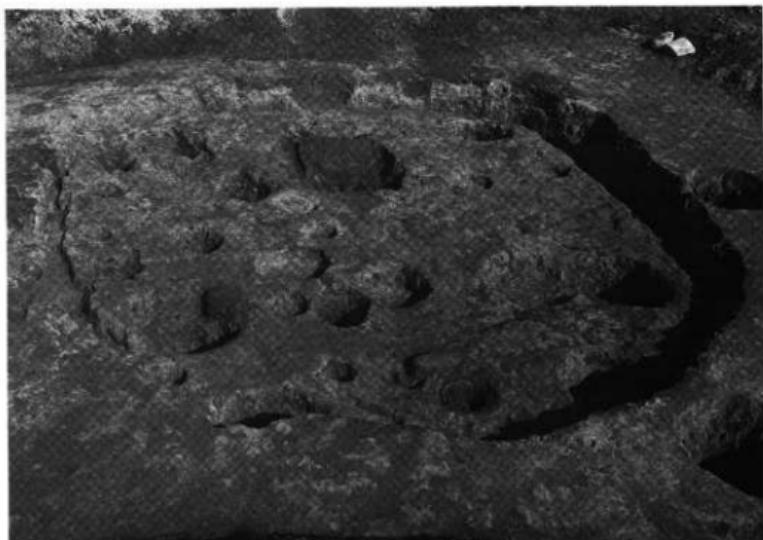
炉址は住居址主軸線上北寄りに位置している。炉石は、壠方北側と西側には残されていた。残されていた炉石は一枚石で、壠方に沿って立てられていた。炉底は焼けていたが、焼土は堆積していなかった（図版72）。

床面は硬く締っており、住居址東側、北、西側の壁に近い部分でやや高くなっている。住居址中央の床面は南側にむかってわずかに傾斜し、南側が最も低くなっていた。周溝は深くしっかりとしており、住居址壁面下を全周する。周溝は住居址南東でいったん跡切れる他は全周していた。南側の張り出し部分の床面上から埋甕が検出され、その内側からは拂土上の礫が据え置かれたかのような状態で出土した（図版75）。埋甕は2個体の土器が入れ子状に埋設された状態で検出された。いずれも正位である（図版76、77、78）。床面からは礫3個が出土している。すべて主柱穴の内側から検出されているが、北西の主柱穴付近からは検出されていない。北東の主柱穴脇から出土した礫は円礫であるが、他の2個は角が取れた偏平な礫である。住居址主軸と炉の位置関係、南壁際のピット、埋甕の位置から、住居址の出入口方向は南であったと考えられる。

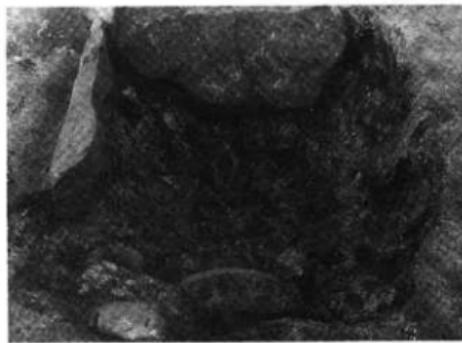
遺物は多量に出土した。器形がある程度復元できた土器には、深鉢が6個体と釣手土器1個体があるのに対し、破片資料は少ない。覆土出土の土器には曾利IV式土器と加曾利E系土器がある。曾利IV式土器の中には加曾利E式最終末の土器に施文される、断面三角形の低い隆帯が施された土器がある。住居址中央部の覆土内からは床面上25cmに小形土器が出土し、床面上約14cmの覆土内からは偏平な礫からなる配石が検出された（図版80、81）。住居址の最大壁高は44cmであることから、配石は住居址が完全に埋りきる前に構築されたものと考えられる。住居址北壁近くの床面上7cmから26cmの範囲からは、加曾利E系の深鉢2個体と釣手土器が集中して出土した（図版122、123）。主柱穴内床面近くから、波状沈線を施された小形土器が出土した（図版82、83）。埋甕には2個体の深鉢が用いられていた。外側の深鉢は、口縁部から胴部上半にかけて口径の約1/3にあたる部分の大形の土器片で、外傾する口縁部は無文で、胴部には半截竹管による条線文の上に、両脇にナデが加えられた低隆帯による渦巻文が施された土器である。内側の深鉢は口縁部から底部まで完全に遺存していた。

石器は打製石斧、石鎌、石鏃ブランク、石錐、石臼、凹石、ビエスエスキーユが出土した。

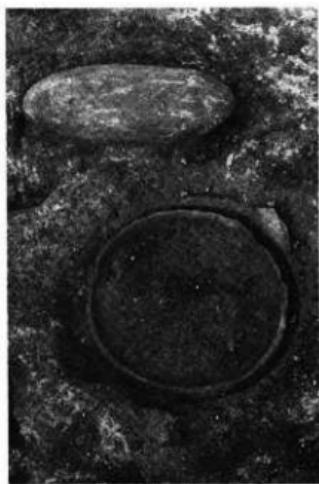
埋甕が曾利III式の特徴をもち、出土土器は曾利IV式が主体となることから、曾利III式期からIV式期にかけての住居址であると考えられる。



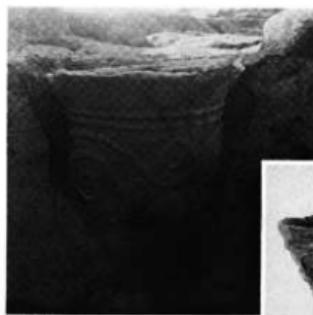
図版73 第38号住居址（南から）



図版74 第38号住居址炉址
(南から)



図版75 第38号住居址
埋甕検出状況（南から）



图版76
第38号住居址
埋甕断面（外側）



图版77
第38号住居址
埋甕断面（内側）



图版78 第38号住居址埋甕
(内側)



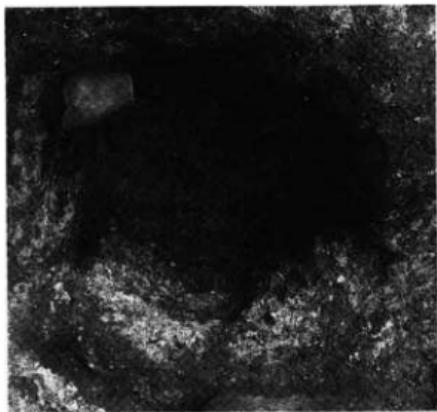
图版79 第38号住居址遺物分布（南から）



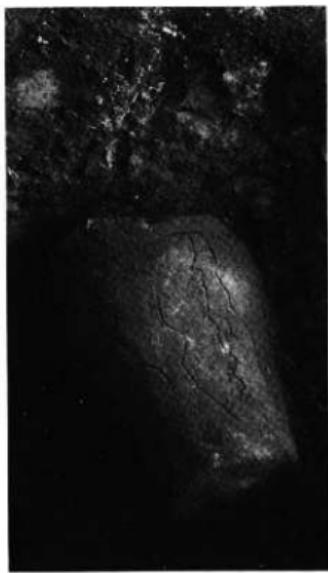
図版80 第38号住居址
小形土器出土状況



図版81 第38号住居址
覆土内配石検出状況（南から）



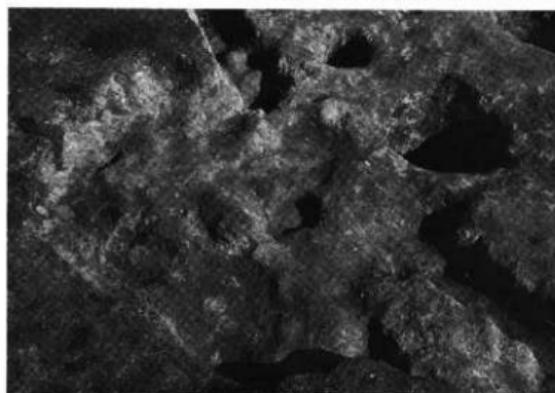
図版82 第38号住居址
柱穴内小形土器出土状況



図版83 第38号住居址
小形土器出土状況（拡大）



図版84 第38号住居址出土釣手土器



図版85 第38号住居址に重複する第375号土坑（南から）



図版86 第375号土坑
土器出土状況
(南から)

第39号住居址

台地平坦面北東に位置する。遺存状態は悪く、確認されたのは主柱穴と炉址のみである。

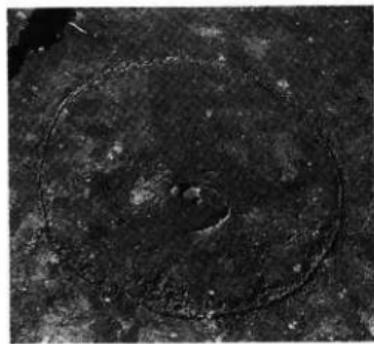
主柱穴は6本で堀方は大きい。炉址は土器埋設炉で、主柱穴を結ぶ範囲の中央に位置する。埋設土器は炉堀方にくらべ小さく、埋設土器の周囲と下部に焼土が堆積していた。以上の調査所見からは、住居の出入口は特定できない。炉址を伴っていることから住居址としたが、住居形式は不明である。

遺物は炉の埋設土器と主柱穴内出土の土器、石器のみである。炉の埋設土器は堀之内I式土器である。石器では、北東隅の主柱穴の覆土上部から磨製石斧1点が海浜礁1点とともに出土した。

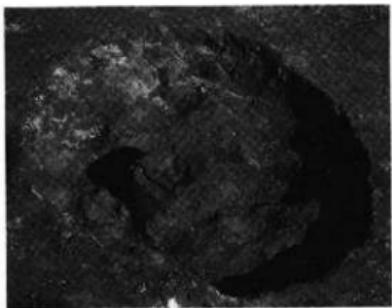
埋設土器から堀之内I式期の居住遺構であると考えられる。



図版87 第39号住居址（南から）



図版88 第39号住居址
炉地検出状況
(南から)



図版89 第39号住居址炉址
(南西から)

(2) 小豎穴

第1号小豎穴

台地先端部が西に向い緩やかに傾斜する部分に位置する。陥穴である第2号土坑、第154号土坑と重複する。第1号小豎穴は第2号土坑を切り、第154号土坑に切られていた。

確認できた壁の高さは約10cmと非常に浅い。平面形は円形で、径約2mと小規模なものである。柱穴、炉址は確認できなかった。床面は軟弱で、西に傾斜している。第2号土坑の範囲内には、ロームブロックが少量混じる土で貼床を設けていた。床面の大きな礫は第154号土坑に伴う礫である。

遺物は少量出土し、中期初頭の土器片が主である。

出土土器から、中期初頭の遺構であると考えられる。

(3) 方形柱穴列

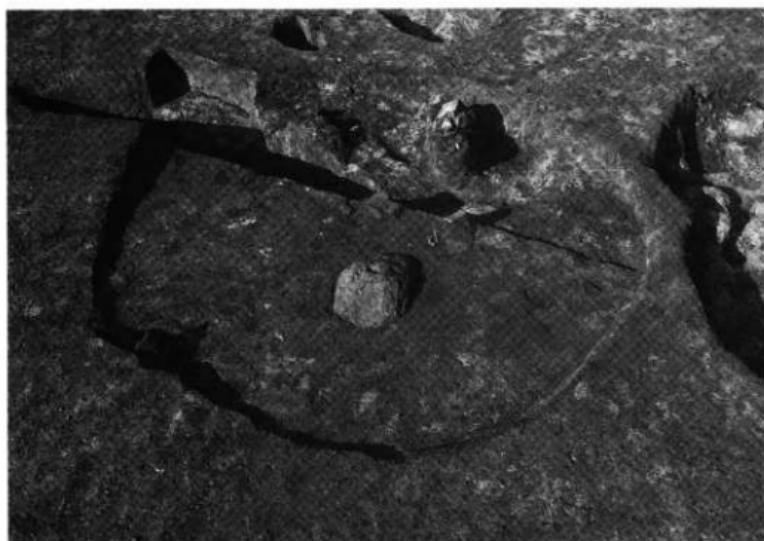
調査中に確認できた方形柱穴列は、1基にすぎない。第14号住居址の西に確認された1辺が2本からなる小規模な方形柱穴列である。台地南斜面に位置していた。図示することができないが、軸方向は斜面に沿うもので、斜面上方の柱穴は浅く下方は深い。柱穴の深さの在り方は、第24号住居址とした遺構と一致する。

このほか第204号、186号土坑のように、いわゆる柱痕が検出された土坑がある。第204号土坑では、柱痕と考えられるI層内から炭化物が検出された。炭化物はあたかも柱の皮にあたる部分が遺存したかのような断面形状を呈する。方形柱穴列については、調査中に極力配置を確認しながら調査したが、配列を確認できたものはない。今後再整理を行なえば方形柱穴列が確認できる可能性は充分にある。

(4) 配石

台地平坦面第22号住居址西側から検出された。板状の礫と角が取れた偏平な礫が組合され列状に配列されたものである。大きく分けて2つのまとまりがみられる。個々のまとまりが独立したものなのか、2つで1群をなす配石であるのか不明であるが、礫の構成は似通っている。敷石住居址である可能性も考え、礫の下部も調査したが竪穴状の掘り込みや柱穴の配列が検出できなかったことから、配石とした。配石を構成する礫の中に凹石、石皿が含まれ、周辺からは堀之内I式土器が出土している。

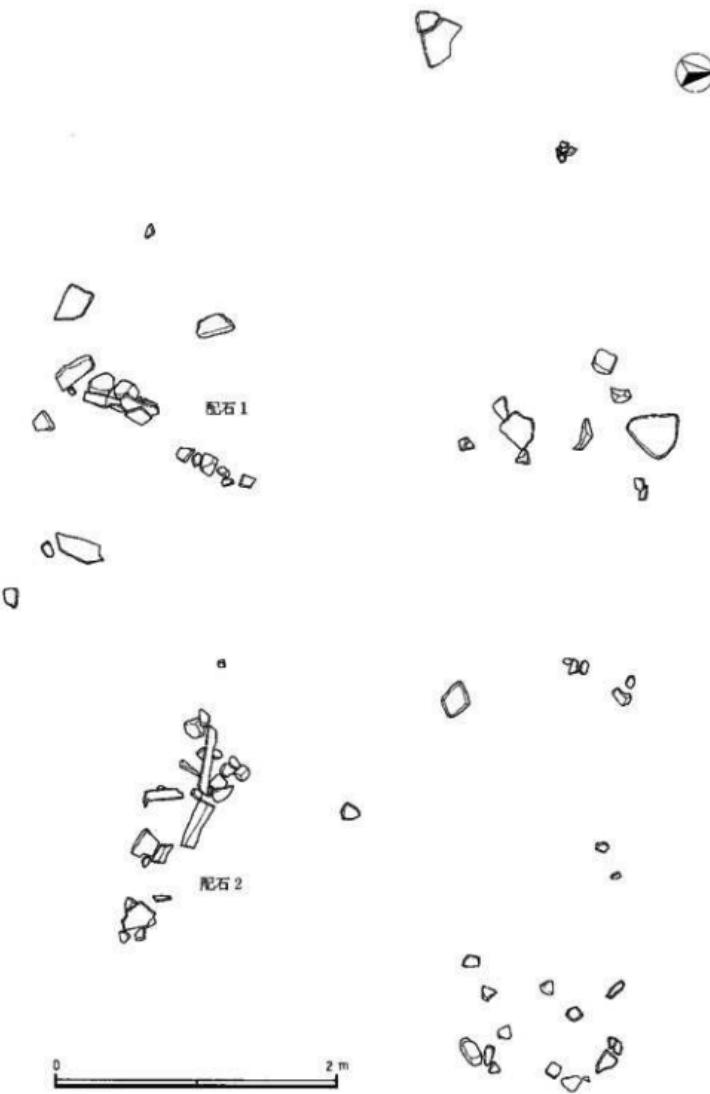
周辺出土の土器から、堀之内I式期の配石であると考えられる。



図版90 第1号小竪穴遺物出土状況（南東から）



図版91 第204号土坑断面（南から）



第12図 第1号、1号配石 (1/40)

(5) 焼土址

焼土址は計10基が検出された。分布範囲は3ヵ所で、台地先端部、台地平坦面中央と台地平坦面南側から検出されている。このうち台地中央から検出された焼土址は、ほとんどが耕作による擾乱を受け、分布範囲、焼土の厚さが不明である。また耕作時に火を焚いたこともあるらしいことから、遺構であると断定することはできない。土坑集中部から検出されたものであること、台地南側の焼土址は擾乱された部分がみられないことから遺構である可能性が残されていると考え報告するものである。稗川頭A遺跡には縄文時代以外の遺構が検出されたいないため、縄文時代の遺構に含めた。

なお焼土址番号は、グリッド単位で付した。

1. B4d2焼土址1

台地先端部の土坑が集中する部分から検出された。漸移層内から検出された。

焼土分布範囲は楕円形で、長径約60cm、短径約50cmである。焼土が含まれる層は暗褐色土との混合土層である（図版127）。焼土は2cm以下のブロックをなしていた。厚さ約4cmが確認され、断面形状はレンズ状を呈する。焼土の分布範囲からその周辺にかけて、他の部分の漸移層に比べ、炭化物が比較的多く検出された。伴出遺物はない。

2. D5c5焼土址1

台地平坦面中央の土坑が集中する部分に位置する。焼土が含まれる層は、耕作により擾乱されていた。

検出時の分布範囲は楕円形で、長径約110cm、短径約90cmである。

3. D5d3焼土址1

台地平坦面に位置する。焼土が含まれる層は、耕作により擾乱されていた。D5e3焼土址1、2と接している。

検出時の焼土分布範囲は楕円形で、長径約110cm、短径約70cmである。

4. D5e3焼土址1

台地平坦面に位置する。焼土が含まれる層は、耕作により擾乱されていた。

検出時の焼土分布範囲は楕円形で、長径約120cm、短径約100cmである。

5. D5e3焼土址2

台地平坦面に位置する。焼土が含まれる層は、耕作により大部分擾乱されていたが、一部漸移層内に遺存していた。

検出時の焼土分布範囲は円形で、径約70cmである。焼土を含む擾乱層の下位層には、微細な焼土粒子がわずかに観察された。

6. D5e4焼土址1

台地平坦面に位置する。焼土が含まれる層は、耕作により擾乱されていた。

検出時の焼土分布範囲は梢円形で、長径約120cm、短径は約100cmである。

7. D5e5焼土址1

台地平坦面に位置する。焼土が含まれる上層は、耕作により擾乱され不明瞭である。D5e5焼土址2に接している。

検出時の焼土分布範囲は梢円形で、長径約160cm、短径約90cmである。

8. D5e5焼土址2

台地平坦面中央に位置する。焼土が含まれる層は、大部分が耕作により擾乱されていた。

検出時の焼土分布範囲は円形で、径約100cmである。焼土を含む擾乱層の下位層には、部分的ではあるが焼土粒子を含む屑が観察された。

9. E3c5焼土址1

台地平坦面南側、第6号住居址西側に位置する。漸移層内から検出された。

焼土分布範囲はほぼ円形で、径約110cmである。焼土は1cm以下のブロック状になっており、暗褐色土が含まれる。焼土が含まれる層の厚さは最大17cmで、凸レンズ状に堆積している。焼土層には、ロームブロックが集中する部分がみられる。焼土層下位には少量の焼土を含む層が観察されたことから、浅い掘り込みを伴うと考えられる。

10. E4b2焼土址1

台地平坦面南側、6号住居址西側に位置する。漸移層内から検出された。

分布範囲は梢円形で、長径約160cm、短径約100cmである。焼土は5cm以下のブロック状を呈し、暗褐色土との混合土層となっている。焼土ブロックが多量に含まれる屑の厚さは最大で約20cmである。この屑の下位に、焼土ブロックが少量含まれる土層が観察されたことから浅い掘り込みを伴うと考えられる。

(6) 土坑

土坑は多数検出された。今回の報告では、調査中の所見をもとに、土坑の種類ごとに代表的なものを取り上げて報告する。土坑の形態、土坑堆方以外の施設の痕跡の有無、遺物出土状況により、便宜的に分類し説明した。遺物の出土状況のうち、土器の破片資料の出土状況については対象外とした。

I. 隠穴

第2号土坑、第18号土坑、第247号土坑、第248号、第394号土坑の計5基が検出された。いずれも平面形は長楕円形である。台地先端部の西向き緩斜面に立地する第2、18号土坑は、斜面の傾斜方向とほぼ同じ向きに長軸方向をもつ。第247、248号土坑は南斜面に位置し、長軸方向は斜面の傾斜方向と直交する。第394号土坑は、台地平坦面と南斜面の境界で、南東に台地の軸方向に直交する谷状地形を臨む位置にある。土坑の長軸方向はほぼ東西に向き、南斜面の傾斜方向と直交する。

II. 断面フ拉斯コ状の土坑

第36号、95号、98号土坑の3基が検出された。台地先端に近く、住居址分布範囲の内側に位置する。3基とも平面形は円形で、第36号土坑の径は126cm、深さ70cm、第95号土坑は径144cm、深さ110cm、第98号土坑は径126cm、深さ100cmと他の土坑にくらべ深い。第95号土坑の坑底からは、深さ10cmほどの円形の掘り込みが検出された。

いずれの土坑からも遺物が少量出土した。第36号土坑では、坑底より約30cm上位から、土器片と四石3点、最大長13.5cmの小型石皿、碟、第95号土坑からは磨石1点、石鏃ランク1点、ビエスキュー2点が出土している。第98号土坑からの出土遺物は多く、人形粗製石匙1点、四石2点、敲石1点、ビエスキュー1点、黒曜石数点の他、欠損した石皿1点が出土している。土坑内の出土位置は3基の土坑とも似通っており、覆土中ほどである。

III. 土坑壁面が直立、外湾する土坑

1. 配石、集石を伴う土坑

第369号、第395号土坑がある。

第369号土坑は、台地平坦面東側の南斜面との境界付近に位置する（図版93、94）。住居址分布範囲の外側で、周囲に他の遺構は検出されていない。土坑の平面形は円形で径約120cmである。坑底の中央に、拳大の礫による方形の配石がつくられていた。配石の1辺は約30cmである。土坑西側の壁際からも碟が偏平な碟を並べたものが検出された。伴出遺物はなく、時期は不明である。

第395号土坑は第1号住居址調査中に検出された（図版95）。平面形は楕円形で、長径約100cm、短径約60cmを測る。深さは最大約18cmが確認できた。土坑中央部やや東よりの坑底直上から、径5cm前後の円礫が固まって出土した。礫のうち何点かには赤い顔料が付着していた。礫は八ヶ岳山麓にはみられないものである。

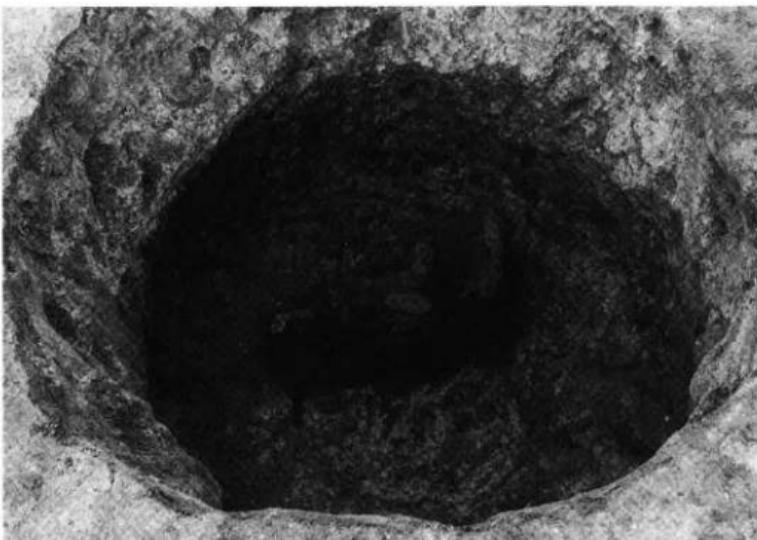
2. 付属ピットが設けられていた可能性のある土坑

259号土坑は、平面形が楕円形で、長径約140cm、短径約100cm、深さ約60cmを測る（図版96）。稗田頭A遺跡では規模が大きい土坑であるといえる。土坑の壁面に接するように、4基のピットトが検出された。土坑に付属するものか否かは不明であるが、注意したい遺構である。块状耳飾りが坑底上約5cmから出土した（図版96）。他に打製石斧2点と磨石1点が出土している。

3. 坑底にピットが検出された土坑

第60号、148号土坑がある。

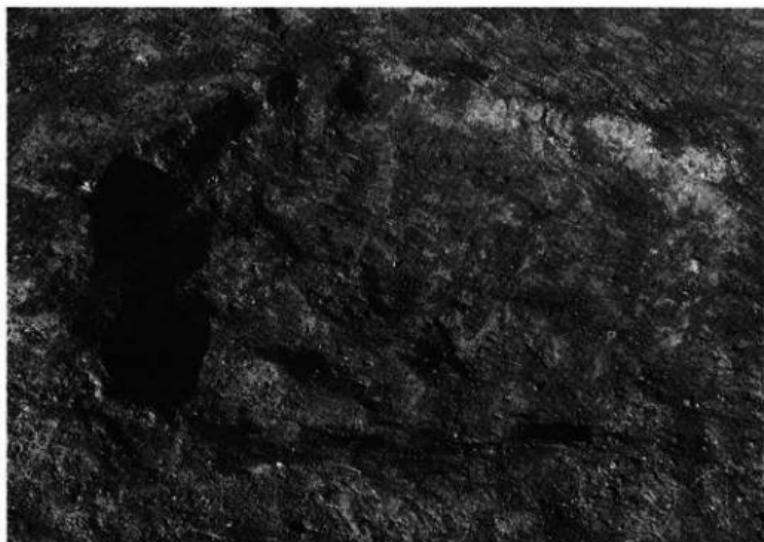
第148号土坑は、平面形が楕円形で、長径約130cm、短径約110cm、深さ約77cmを測る。坑底のピットは楕円形を呈し長径約30cm、短径約20cm、深さは約17cmである。



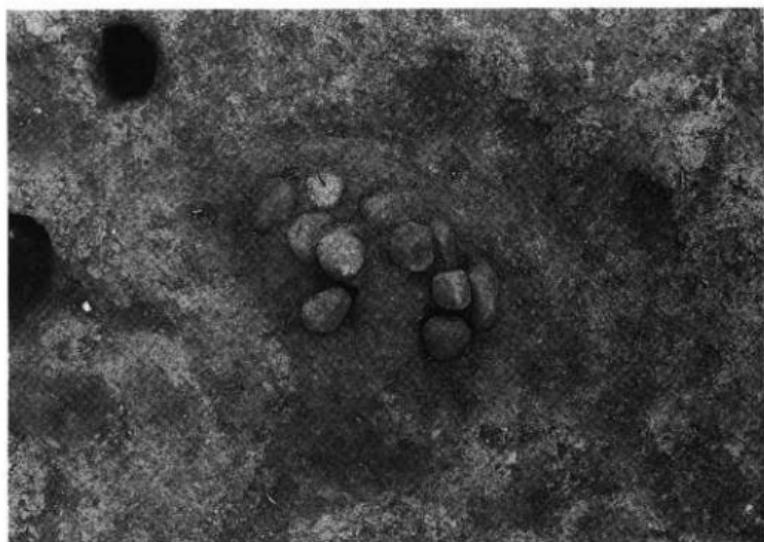
図版92 第95号土坑（南から）



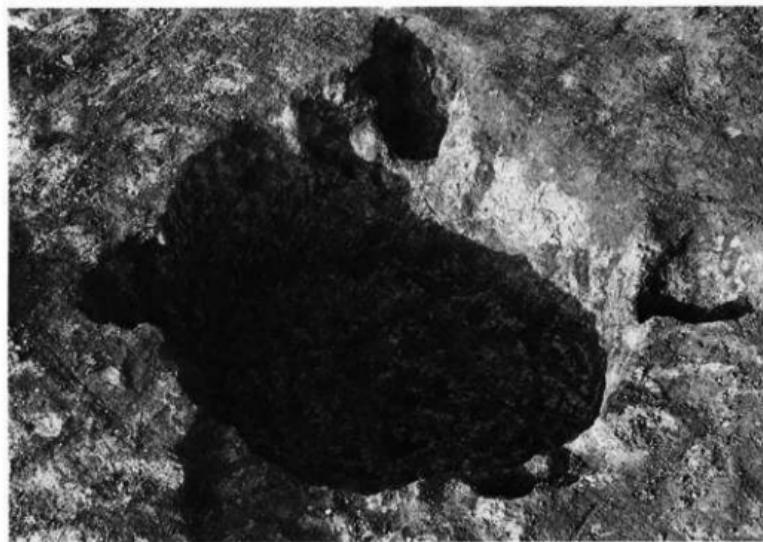
図版93 第369号土坑（北から）



図版94 第369号土坑完掘状況（南から）



図版95 第395号土坑（南から）



図版96 第259号土坑（南から）



図版97 第259号土坑块状耳飾り出土状況（南から）

4. 焼土を伴う土坑

a. 覆土上部に焼土を伴う土坑

第217号、331号、372号土坑がある。

第217号土坑は、平面形が楕円形で長径約70cm、短径約60cm、深さ約38cmのやや小規模な土坑である。覆土は1層で焼土は粒子状に観察された。焼土の分布範囲は、確認面下約3cmまでの範囲に限られていた。

第331号土坑は平面形が楕円形で、長径約100cm、短径約70cm、深さ約48cmを測る。土坑覆土は2層に分層された。焼土が含まれていたのは第1層で、焼土ブロックと暗褐色土との混合土である。第2層には焼土は観察されなかった。第1層、第2層は、ともに3mm以下の炭化物を含んでいたが、第1層により多く含まれていた。

第372号土坑は、平面形が楕円形で長径約100cm、短径約84cm、深さ約44cmを測る。土坑確認面からは、焼土とともに断面円形の棒状礫と偏平な礫が出土した（図版124、125）。焼土は遺物の下位で多量に検出され、長円形の土坑の中央東側に円形に分布する。断面形状はレンズ状で、厚さ最大約40cmを測る。焼土は固く縮っており、焼土内には灰色の混入土がブロック状に観察された。焼土層の上位の土層には1cm以下の焼土ブロックが多く含まれていたが、下位の土層には8mm以下の焼土ブロックが少量観察されたのみである。下位の土層にはロームブロックが多く含まれていた。遺物は確認面の礫の他に、打製石斧1点、凹石2点、ビエスエスキーユ3点が出土した。

b. 坑底に焼土を伴う土坑

第38号住居址を切る第375号上坑がある（図版85、86）。第37号住居址内からは多くの柱穴が検出されていることから、住居址の炉竈である可能性も残されるが、柱穴配置が不明瞭なこと、住居址の壁が検出されなかったことから土坑としてとらえた。土坑は楕円形で、中央部分から焼土が検出された。焼土中央部には土器の底部が焼土に埋るように直立しており、焼土は上器の底面の5cm上まで堆積していた。坑底のハードロームは赤く変色していることから、火を受けたものと思われる。焼土の分布範囲以外の部分では、火を受けた痕跡はみられなかった。

5. 遺物が出土した土坑

A. 磬が出土した土坑

a. 覆土から磬が出土した土坑

第6号、33号、306号土坑がある。

第6号土坑は平面形が楕円形で、長径約130cm、短径約110cmを測る。深さは約30cmである。磬は、土坑の南西寄りから5点ほど出土したが、大きな磬は2点で、最大長はそれぞれ約30cm、約17cmである。小さな磬は坑底より約10cm、大きな磬は坑底より約15cm上位から出土した。

第33号土坑は平面形は円形で、径約100cm、深さは約24cmを測る。磬は土坑中央付近、坑底より約24cm上位から出土した。偏平な磬で、最大長約30cm、厚さは約10cmである。

b. 坑底から磬が出土した土坑

第3号住居址内土坑（図版98）、第35号上坑などがある。

第35号土坑の平面形は円形で、径約115cm、深さ約50cmを測る。磬は2個出土した。それぞれ偏平な磬で、最大長は約30cm、約20cm程である。

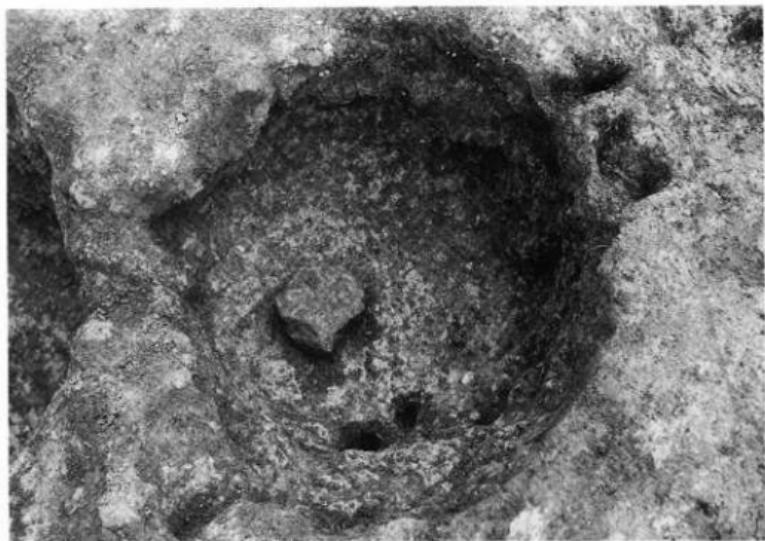
B. 完形、半完形の土器が出土した土坑

第5号、59号、89号、302号、320号、371号上坑がある

第5号土坑は平面形が円形で、径約100cm、深さ約37cmを測る。土器の出土位置は、土坑長軸線上やや南寄りである（図版99）。土器は底部が穿孔されており、正位の状態で出土した。土器底部は坑底上約6cmで、ほぼ坑底直上である。出土土器は無文の深鉢で、後期前半の土器であると思われる。

第59号土坑は平面径が円形で、径110cm、深さ約33cmを測る。坑底の南側の部分から逆位の底部と横倒しになった胴部が偏平な磬とともに出土した（図版99）。中央部では土器片が散漫な分布状況を示す。土器は中期初頭の深鉢である。遺物は坑底上約10cmより上位に分布していた。

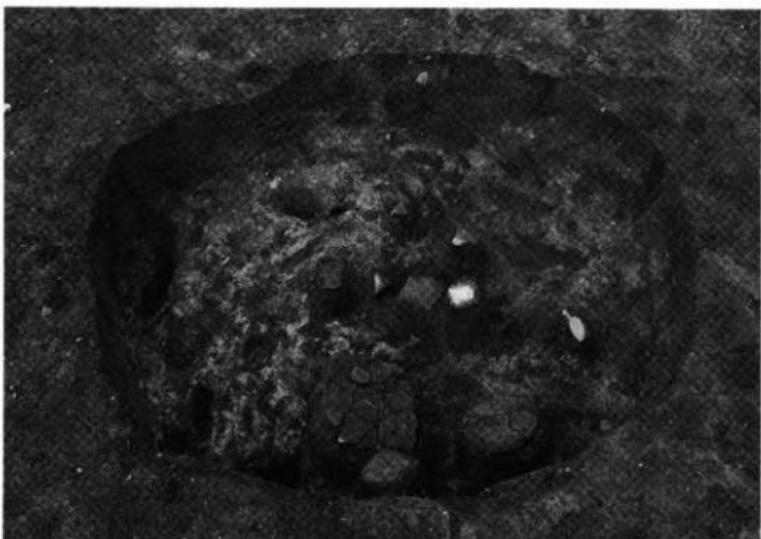
第89号上坑は平面形が楕円形で長径112cm、短径94cm、深さ27cmを測る。磬1点と中期初頭の深鉢胴部上半が出土した。土器は坑底中央直上に横倒しの状態で検出された。



図版98 第3号住居址内土坑検出状況（南から）



図版99 第5号土坑土器検出状況（東から）



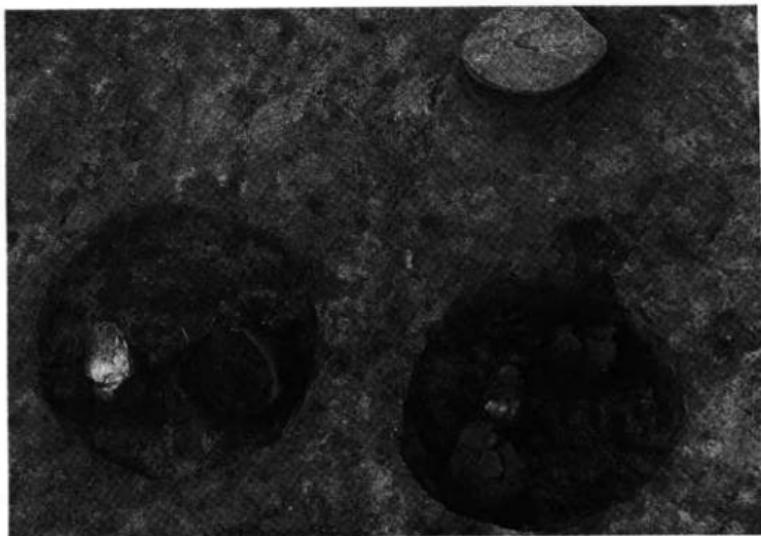
図版100 第59号土坑遺物出土状況（南から）

第302号土坑は、平面形が円形で、径約94cm、深さ約42cmを測る。中期初頭の土器2個体が出土した。土器を土器が埋めるかの様な出土状況であった（図版126）。

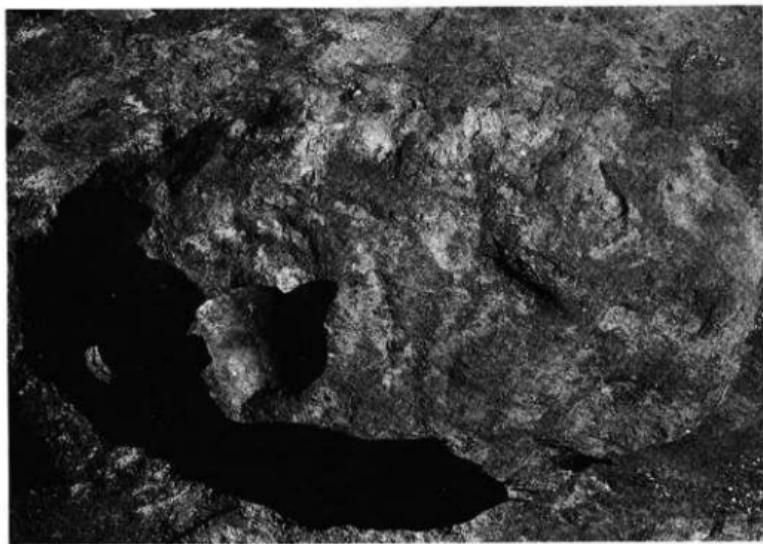
第320号土坑からは小形の土器が出土した。土器の出土位置は土坑壁際に寄った部分である（図版102）。

第371号土坑の平面形は橢円形である。加曾利B I式に比定される鉢形土器が、土坑中央西壁際から正位で出土した（図版103）。土器は坑底上約5cmから出土していることから、坑底直上の出土と考えてよいと思われる（図版104）。

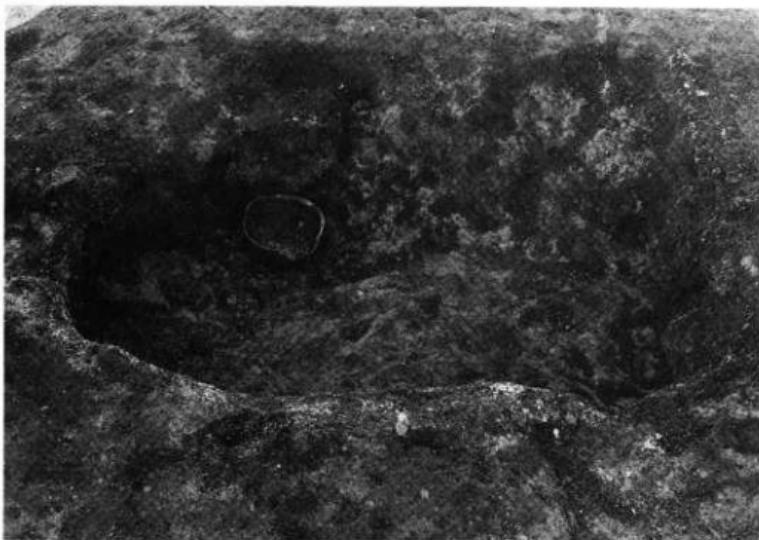
以上の他、土器の一部分が出土した土坑として、第80号土坑出土の猪沢式土器の口縁部（図版105）、第158号土坑出土の土器底部などがある。第24号土坑は、径約170cm、深さ約27cmの円形の土坑であるが、径に比べ深さが浅い点が他の土坑と異なっている。土器片は坑底から約7cm上位から検出され、土坑全面にわたって出土した（図版106）。土器片が出土した土坑は多く、第20号、23号、24号、104号、163号、284号土坑などがある。第20号土坑からは、小破片が覆土上部から固まって出土した（図版107）。



図版101 第89号、90号土坑遺物出土状況（南から 左が第89号土坑）



図版102 第320号土坑土器出土状況（南東から）



図版103 第371号土坑土器出土位置（東から）



図版104 第371号土坑土器出土状況（北東から）



図版105 第80号土坑土器出土状況（西から）



図版106 第24号土坑土器出土状況（南から）



図版107 第20号住居址土器出土状況

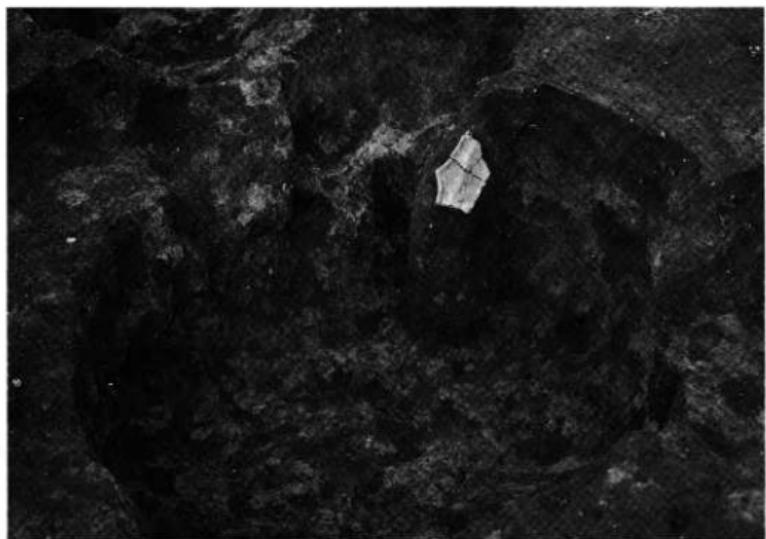
C. 石器が出土した土坑

打製石斧が出土した第5号、23号、55号土坑、石皿が出土した第68号、149号土坑、凹石が出土した第69号土坑などがある。

土坑から出土した石器の種類には、いわゆる利器のうち石鎌、ピエスエスキーユ、石錐、スクレイパーなどの比較的小型の石器、磨製石斧、打製石斧、横刃型石器などの大形の石器がある他、敲石、凹石、磨石、石皿などの日常生活用具、道具の素材、未成品である石鎌ブランク、黒曜石製剝片、黒曜石製石核、黒曜石原石などがある。

石器は完形土器、土器破片とともに出土することが多い。第23号土坑は、径約100cm、深さ約44cmの円形の土坑であるが、比較的大きい深鉢の口縁部破片と打製石斧1点が出土している。また第55号土坑は、平面形が円形で径約123cm、深さ約27cmを測り、打製石斧2点、礫2点が出土した。いずれも坑底上約10cmから出土し、石器とともに土器片が数点出土している。

出土遺物の最終確認を行なっていないため、現段階では断言することはできないが、大形の利器や凹石などの礫素材の日常生活用具を出土する土坑では、1基の土坑に複数種の石器が共伴することはまれである。2種類の石器が出土した事例は1例が確認できる。第149号土坑の、横刃型石器2点と石皿1点が出土した例である。



図版108 第23号土坑土器出土状況（南から）



図版109 第55号土坑遺物出土状況



図版110 第68号土坑石皿出土状況（南から）



図版111 第149号土坑遺物出土状況

D. 石製品、用途不明の遺物が出土した土坑

日常生活用具以外ものとしては、軽石、玦状耳飾が出上している。他に最大長13.5cmの小型の石皿、蜂の巣石、タール状物質が付着した礫土製円盤など、用途不明の出土遺物がある。土器破片や日常生活用具と考えられる遺物とともに出土した例がある。第135号土坑では打製石斧1点と土製円盤1点が出土し、第183号土坑では横刃型石器と蜂の巣石が、第359号土坑からは凹石1点と軽石1点が出土した。

軽石が出土した土坑は4基が確認できる。軽石はいずれも不定形で概して小さめである。

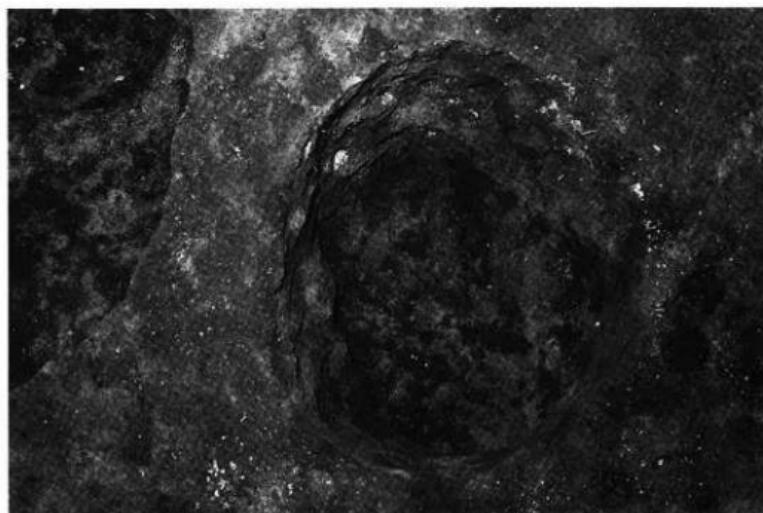
土製円盤は2基の上坑から出土している。1基は第3号住居址とした造構内から検出された土坑であるが、第3号住居址周辺からは6点の土製円盤が出土している。

6. 遺物が出土しない土坑

多數検出されたが、正確な実数は整理途上の現段階では把握できていない。

IV. 柱穴様の土坑

第166号、170号土坑（図版112）など多數が検出された。



図版112 第170号土坑

第V章　まとめ

先土器時代

先土器時代の遺物は2点と数が少ない。他の出土遺物の中に混在している可能性はあるが、今回の調査では遺物ブロックなどの遺構は検出されなかった。八ヶ岳山麓部においては、楢木地区の上見遺跡で小規模なブロックが検出されて以来、3か所の遺跡から先土器時代の遺物が出土している。また今回の調査期間中に、地元地権者の方から提供された稗田頭B遺跡の表面採集資料のなかに、ナイフ形石器1点が含まれていた。この資料については正確な出土状況、位置が不明であるが、先土器時代遺跡が存在する可能性を示すものである。稗田頭A遺跡出土の尖頭器は、台地先端に近い位置から出土したもので、大泉山東側の低地を臨む地点に立地する点上見遺跡と類似している。従米柳川以北の八ヶ岳山麓では、先土器時代遺跡の分布が希薄であると指摘されてきたが、楢木地区での調査成果から、当面柳川以北の地域のうち少なくとも、柳川からでは、依然として先土器時代遺跡の分布は不明である。以前から豊平、湖東地区に先土器時代遺跡が発見されないことについて、北八ヶ岳の火碎流との関係が指摘されている。八ヶ岳を原産地とする黒曜石は関東地方にまで運ばれているが、原産地の周囲である八ヶ岳山麓部での先土器時代遺跡の内容については、不明な部分が多くあった。黒曜石の運ばれ方を考える上で、黒曜石原産地から山麓部にかけての先土器時代遺跡の分布を把握することが当面の課題であると思われる。

縄文時代

稗田頭A遺跡は、台地先端部に選地する縄文時代中期初頭から末葉にかけて断続的に形成された集落址である。集落景観は縄文時代集落の代表例であるが、集落構成要素を取り出してみると幾つかの特徴がうかがわれる。ここでは調査時の所見を加えて幾つかの特徴を挙げ、まとめにかえたいと思う。

稗田頭A遺跡で最も多く見られる住居址は、平面形が隅丸五角形の住居址である。主柱穴配置の違いによって2類型に分類できる。一つは主柱穴が3本であり、住居址平面形の長辺に直交するように出入口が設けられたと考えられる住居址である。第2号住居址を典型とする。この類型の住居址に対して、主柱穴が4本で平面形の長軸方向に出入口を設けたとみられる住居址がある。第22号住居址を典型例とする住居である。両類型とも張り出した部分を出入口としている点では共通している。主柱穴が3本の住居址は、炉のすぐ北に主柱穴をもつ。主柱穴の数と位置の違いから住居の上層構造が異なっていたと推定できる。2つの類型の住居が同時存在か、時間的に分

れて存在していたかについては、土器の詳細な分類と縦年学的な検討を行なわねばならない。出土土器を一覧した限りにおいては、2つの類型の住居址は、曾利III式期から曾利IV式期に属するものが多く、時間的な隔たりが大きはないと思われた。3本主柱穴配置の住居址は、第2号住居址の時期が曖昧であるが、曾利III式期の第32号住居址が稗田頭A遺跡での初現であり、曾利IV式期の住居址では約半数が3本主柱穴配置の住居址で占められる。

住居の規模に大きな差はみられなかった。台地南斜面につくられた猪沢式期の住居址は規模が不明であるが、曾利III式期からIV式期に属する住居は小さなものが多い。その中で第30号住居址は、稗田頭A遺跡の中では大形の住居である。床面上に残された縄の配置からみても、稗田頭A集落の中では特徴的な住居である。

住居址の大きさと、2類型の住居址の存在は曾利III式からIV式期における稗田頭A集落の集団関係を考える上で、一つの手がかりになると考えられている。

出土遺物を加味して考えるなら、第38号住居址、第6号住居址も他の住居と異なる点がみられた。第38号住居址は覆土内に配石をもち、出土遺物の中に、釣手土器、小形土器などが出土し、第6号住居址からは翡翠製の垂飾品が出土した。第30号住居址と第38号住居址は時期が異なっているが、台地平坦面北側に位置し、住居址の分布型からみると最も北に位置している。この第30号住居址は曾利II式期につくられ、稗田頭A遺跡の中期末葉住居址の中では、最も早くつくられた住居であり、曾利III式期からIV式期の移行期に廃絶されている。第38号住居址は曾利III式土器を用いた埋甕が検出され、覆土内出土の土器は曾利IV式期の土器である。各住居址出土の土器群の対比は今後の課題であるとしても、交代するかのようにつくられた2基の住居址の集落内での位置は注目に値するものである。日常生活用具と考えられない遺物を出土した住居址としては、翡翠製の垂飾品が出土した第6号住居址が挙げられる。

稗田頭A遺跡の住居址群は、みかけ上はほぼ孤塚あるいは灰環状の分布型を示すが（第16図）、時期別に住居の展開をみると集落立地に大きな変化がみられ、猪沢式期と曾利II式期の間に断絶がみられた。この断絶期を境に集落立地が変化し、前期末から猪沢式期では台地斜面に住居を構築していたのに対し、曾利II式期以降では台地平坦面の広い空間を住居域として利用するようになる。集落規模も益々に変化しており、時期別の住居群の展開をみると、変化の過程の違いがより明確に読み取ることができる。

縄文時代前期末から猪沢式期にかけては、集落を構成する住居の数が少なく、時期別にみても住居数がさほど変化していない。前期末に當まれた第14号住居址以後、中期初頭の住居址が3基、猪沢式期の住居址が4基検出された。周辺の遺跡において縄文時代前期末から中期初頭の住居址が発見されているのは中原遺跡のみであることを考えると、当該期における稗田頭A集落は、縄文時代中期八ヶ岳山麓における遺跡群の形成過程を示すものとして重要な意味をもつ。



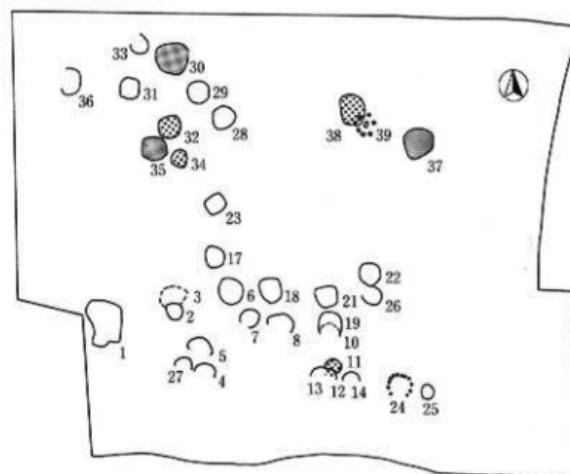
第13図 綱文時代住居址時期別分布図(1) (1/1000)

猪沢式期の集落は台地南斜面に選地しており4基が検出されている。炉体土器の型式学的特徴や、住居が近接した場所に集中していることからみて、4基の住居址は段階差をもつと考えられ。1時期の住居数は3棟以下であり前中期以来大きな変動はなかったと思われる。住居址の立地の連続性からみても、前期に始まった集落形成を引継いだものと考えられる。

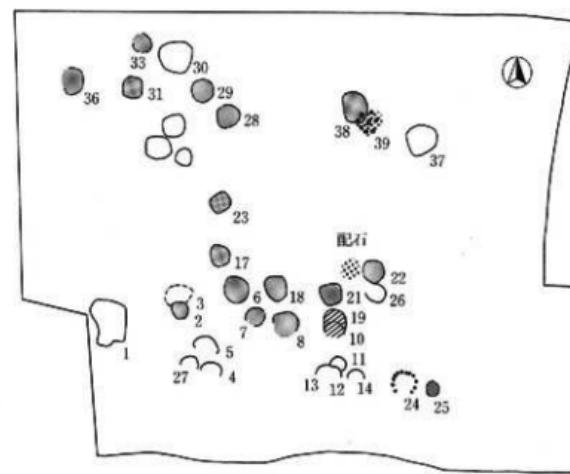
次に集落が営まれるのは曾利II式期である。稗田頭A遺跡が立地する台地に、本格的な集落が形成されたのはこの時期以降のことである。曾利II式期の住居址は3基検出されたが、住居を建てる場として台地平坦面を選んでいる。曾利II式期の集落規模については、各住居址の時間差の検討が必要であり、不明とせざるを得ない今回の概要報告では、前中期から猪沢式期にかけての数段階にわたる集落形成と、曾利II式期以降の集落形成には集落形成期当初における住居数に違いがみられる可能性が指摘できるのみである。曾利II式期から曾利III式期にかけては、住居数に大きな変化がないが、曾利IV式期になると住居数が大幅に増加する。出土土器の系統別の組成や住居址間の距離からみて、曾利IV式期の住居址にも段階差が考えられるが、曾利III式期の3基の竪穴住居が、第25号住居址を除いたとしても15基に増加する現象は、集落規模の急激な拡大と考えてもよからうと思われる。

曾利IV式期における住居数の増加と対照的に、曾利V式期に属すると考えられる住居址は1基しか検出されなかった。本報告に際しての、曾利V式土器の把握に問題があるとも思われるが、集落規模の急激な縮小を表わす可能性もあると考えられる。

曾利V式期以降の住居址には、第39号住居址、第6号住居址覆土上面に存在した可能性のある



第14図 縄文時代住居址時期別分布図(2) (1/1000)



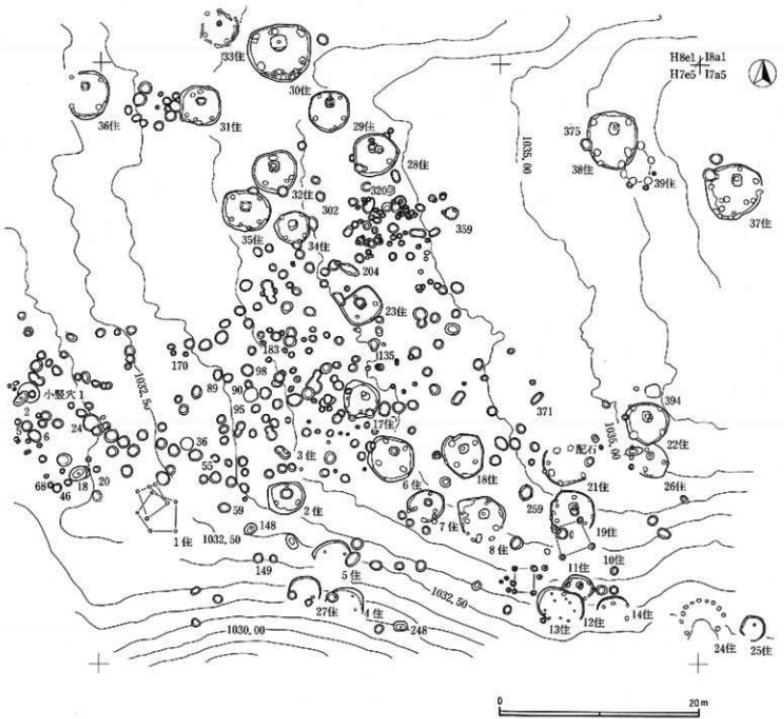
第15図 縄文時代住居址時期別分布図(3) (1/1000)

住居址がある。関東地方の称名寺式併行期の遺構は確認されなかつたが、掘之内Ⅰ式期の住居址と考えられる遺構と配石は検出されている。後期前半の遺構の全体像が明らかになつておらず、性格が不明である現段階では、第1回目の断絶期と称名寺式併行期の断絶期が同質の時間的空白であるかは不明である。

茅野市域も含めた中部高地では、縄文時代中期に遺跡数が増加するといわれているが、遺跡内住居数では、中期の各段階に住居数の変動がみられる。住居数の変動が、集落構成人員の規模の変動に対応する現象であると考えれば、縄文時代中期の生活形態に変化があったと考えるべきである。近隣の既調査遺跡である上見遺跡、中原遺跡、鴨田遺跡では、稗田頭A遺跡とはほぼ同じ時期の集落址、土坑群が検出され、鴨田遺跡では、稗田頭遺跡の断絶期である曾利Ⅰ式期、称名寺式併行期の遺構が検出されている。大泉山東方の遺跡群のように遺跡が密集する地域では、土器の比較検討を軸にし、遺跡間の関係を集団の移動、あるいは集団領域視点からとらえなおす必要があると考えられる。

引用参考文献

- | | | |
|------|----------------|----------|
| 1986 | 「茅野市史 上巻 原始古代」 | 茅野市教育委員会 |
| 1990 | 「櫛畳遺跡」 | 茅野市教育委員会 |
| 1991 | 「上見遺跡」 | 茅野市教育委員会 |
| 1991 | 「茅野市遺跡台帳」 | 茅野市教育委員会 |
| 1992 | 「中原遺跡」 | 茅野市教育委員会 |
| 1992 | 「鴨田遺跡」 | 茅野市教育委員会 |



第16図 稲田頭A遺跡遺構分布図 (1/400)



図版113 遺跡現況（南東から）



図版114 調査風景（西から）



図版115 調査風景（西から）



図版116 第38号住居址調査風景（西から）



図版117 第23号住居址調査風景（南西から）



図版118 第23号住居址土層断面図作成（南西から）



図版119 第23号住居址遺物分布図作成（西から）



図版120 第37号住居址調査風景（西から）



図版121 第6号住居址遺物出土状況



図版122 第38号住居址遺物出土状況（南から）



図版123 第38号住居址遺物出土状況（南から）



図版124 第372号土坑
検出状況（南から）



図版125 第372号土坑焼土堆積状況



图版126 第302号土坑土器出土状况



图版127 B4d2烧土址检出状况

稗田頭A遺跡

平成4年度賃営開墾整備事業概本地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書

平成5年3月16日 印刷

平成5年3月18日 発行

編集長 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
発行 茅野市教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社

